

平成16年度神戸大学「ツーリズム」フォーラムの記録
“観光”から“ツーリズム”へ
—多様なツーリズムの可能性を探る—

小 西 康 生 編

神戸大学経済経営研究所

2005

目 次

はじめに

平成16年度神戸大学「ツーリズム」フォーラム 1

開会の辞 3

第 I 部 基調講演

第 1 章 国内外から人が訪れる賑わいひょうごの創出 5

第 2 章 我が国のツーリズム戦略 33
—観光の現状と国際競争力のある観光地づくりへの取り組み—

第 II 部 パネルディスカッション

第 3 章 ツーリズムにおける地域連携の課題 59

閉会の辞 97

おわりに

執筆者紹介および参加箇所

- 小西 康生 神戸大学経済経営研究所教授
はじめに
第3章 パネルディスカッション（コーディネーター）
おわりに
- 鈴木 正幸 神戸大学理事・副学長
開会の辞
- 井戸 敏三 兵庫県知事
第1章 国内外から人が訪れる賑わいひょうごの創出
- 鷲頭 誠* 國土交通省大臣官房総合観光政策審議官
第2章 我が国のツーリズム戦略
- 江木 耕一 兵庫県産業労働部長
第3章 パネルディスカッション（パネリスト）
- 小林 英俊 (財)日本交通公社理事・観光マーケティング部長
第3章 パネルディスカッション（パネリスト）
- 寺本 光雄 太成学院大学教授
第3章 パネルディスカッション（パネリスト）
- 奥村 弘 神戸大学文学部助教授
第3章 パネルディスカッション（パネリスト）
- 西村 肇* 兵庫県城崎町長・㈱西村屋代表取締役社長
第3章 パネルディスカッション（パネリスト）
- 山地 秀俊 神戸大学経済経営研究所長
閉会の辞

*肩書はフォーラム当時のもの

はじめに 一フォーラムの開催趣旨一

神戸大学経済経営研究所には学内外の研究者などと共同研究を行う組織があり、「研究部会」と呼ばれている。研究所の組織改革に即して、2000年から既にあったものを一新して、新組織に対応した新たな体制で取り組んでいる。

「ツーリズム研究部会」は、それまでは「地域情報化研究部会」に属していたが、これを機に独立したものである。当研究所にはツーリズムを主たる研究対象としているスタッフはいないが、学外の研究者や地方自治体の関連部局の職員の方々に広く参加を呼びかけ部会を発足させた。本書はこの研究部会が中心となって2005年3月19日に本大学経済経営研究所並びに地域連携推進室の支援の下に開催した『平成16年度 神戸大学「ツーリズム」フォーラム』（プログラムは後掲）の記録である。可能な限りフォーラムの臨場感を演出しよう試みている。

当研究部会の活動は、平均隔月に研究会を開催している。それらを基に、これまで既に2冊の研究叢書を取りまとめてきている。最初の叢書（『ツーリズム研究の諸相』 神戸大学経済経営研究所研究叢書No.61 2003）では、研究会のメンバーによる、それぞれの当面の関心テーマについての論文を全体の統一を一切配慮せずに取り集めたものである。そこでは「ツーリズム」の研究テーマが変遷・拡張してきていると共に、メンバーの関心分野が多岐に渡ることが明らかになっている。

最近の叢書（『「ツーリズム」関連統計－その現状と課題－』 神戸大学経済経営研究所研究叢書No.65 2005）では、ツーリズムの研究を行うに当たって、基礎となる関連統計に不備があることが深刻な課題となっていることを考え、そこに焦点を置いた議論を取りまとめた。「ツーリズム」活動はさまざまな分野で多彩に分析されるが、簡単にアクセスできるデータは必ずしもそのままでは操作できる状況はない。この点についても一般の多くの人たちのみな

らず政策担当者さえも充分には認識されていないでは無かろうか。同じ用語を使いながら別のことと言っているのはさまざまな統計に共通する現象であり、「ツーリズム」分野に固有のものではない。他の統計について深刻なのは専ら国際比較の際に遭遇するが、「ツーリズム」関連分野では国内あるいは同一府県内でも生じている。データをこのままにしておくと、施策立案どころか実態把握さえも不可能である。この叢書では、国内の近隣自治体（兵庫県、神戸市、大阪府、大阪市、京都府、京都市、奈良県）の実状と海外の状況について研究会の報告を中心に取りまとめた。併せて、「ツーリズム」活動のどの側面を分析するかによって、どのような課題があり、それらに対する取り組みがどのような状況にあるかにも言及した。政令都市を含む府県では、府県のデータさえも歪なまま統合されていることが明らかである。さらに、国内については周囲から独立しているので統計の把握が容易ではないかと考えて、研究会で現地を訪れた沖縄県の状況を掲載した。

われわれはいまだによく使われているような「観光」を脱却して「ツーリズム」という新たな概念を用いなければ、現実を的確に把握できないとの認識では一致している。中には「広い」とか「狭い」、あるいは「旧い（従来の）」とか「新しい」といった形容詞を「観光」に付けて対処しようとしている向きもあるが、この研究部会のメンバーの中では、そのような対応だけでは対処しきれない点があるとして、「ツーリズム」といった用語を使うことをしている。そこには「観光」と「ツーリズム」の間には小手先の対応だけでは対処しきれない哲学ともいえる根本的な違いがある。

これまでの共同研究で、ますます「観光」を脱却して、「ツーリズム」へ進まなければならないことを強く実感してきた。このことについて、われわれの研究会内部だけでなく、広く情報を発信して大方の理解を得なければならぬと考え、予てから適当な機会を模索していた。神戸大学が法人化すると同時に設置された地域連携推進室に社会科学系から協力教員として参加していたとこ

ろ、総合大学である神戸大学のスタッフを含めた学内資源を広範に活用した地域連携のテーマとして「ツーリズム」が取り上げられることになった。そこで、平成16年度教育研究活性支援経費による戦略的・独創的な教育研究プロジェクト事業経費を活用して、当研究所との共同事業として取り組むことが可能になった。

広範に情報を発信するのであれば、フォーラムが一つの方法である。フォーラムのテーマを「“観光”から“ツーリズム”へ—多様なツーリズムの可能性を探る—」として、その内容をどうするかを考えた。形容詞付きの「観光」を標榜している方々ではなく、「ツーリズム」に取り組もうとしている人たちに基調講演なり、パネルディスカッションに参加していただくことにした。

ツーリズムについての包括的な取り組みを行っている国際機関はWTO (World Tourism Organization) であり、そこで基準になるような概念が整理されている。日本で使っている「観光」とは異なる概念であるが、それをまず示さなければならない。そのため、基調講演者はこの点に焦点を置いて人選に取りかかった。幸い地元兵庫県では最近「観光」をやめて「ツーリズム」といった言葉を使用するようになっており、関連施策のタイトルもそれに併せて変更されていたし、関連機関も同じように名称が変更されていた。私の知る限りこのような変更は兵庫県を嚆矢とするものである。そこで、兵庫県知事井戸敏三氏には是非ともキーノート・スピーカーの一人になってもらいたかった。知事は多忙でありなかなか返事がもらえなかつたが、限られた可能性からたまたまスケジュールの空いていた日時を押さえることができた。

今回のフォーラムの全てのスケジュールの具体化はここから始まったと言つてもよい。知事のスケジュールに合わせて、二人目の基調講演者やパネリストの人選に取りかかった。開催場所は学内で利用可能なところを当たり、地域連携推進室担当の鈴木正幸理事・副学長と経済経営研究所の山地秀俊所長の当日のスケジュールを押さえた。当初、二人目のキーノート・スピーカーは外国の

研究者を考えていた。イギリスには親しい研究者がいるので、予め当たってはいたが、最終的に確定したスケジュールでは残念ながらイギリスの大学の年間スケジュールとの関係で適当な研究者の都合がつかなかった。そこで、イギリス以外の外国の研究者の紹介をさまざまな伝を使って当たってみた。数名の候補者名が各方面から寄せられた。この時期に、当大学の赤塚宏一監事と面識ができた。赤塚監事はロンドンに長期滞在の経験があり、その間に昵懇になった方の一人が国土交通省大臣官房総合観光政策審議官の鷺頭誠氏だと判明した。そこで、赤塚監事にわれわれの趣旨を説明し、鷺頭氏にコンタクトをとっていただいた。幸い鷺頭氏のスケジュールに空きがあり、われわれの主旨を理解いただき基調講演者として承諾していただいた。当初の予定を変更して、わが国における地方と国のトップの責任者にそれぞれの立場から現状や課題をお話していただくこととした。折角、候補者名を挙げていただいた方々にはご迷惑をおかけすることになったが、事情を説明して、納得していただいた。

パネリストは多方面からお願いすることになった。フォーラムのパンフレットに記載されている順に紹介すると、次のようになる。兵庫県の担当者である産業労働部長の江木耕一氏には「観光」から「ツーリズム」に変更した兵庫県の取り組みをお話していただくことにした。(財)日本交通公社理事・観光マーケティング部長の小林英俊氏には、広い立場から「観光」から「ツーリズム」への変遷の必然性を紹介してもらうことにした。ただ、小林氏の肩書きが「ツーリズム」ではなく「観光」になっているところに全国的な取り組みの一端が伺える気がした。太成学院大学教授の寺本光雄氏は当研究所のツーリズム研究部会のメンバーでもあり、府県や政令指定都市より下位レベルの地方自治体でも関連する分野での取り組みに多数関わってこられているので、それらを紹介していただき、ことに関連データの不備を指摘していただくことにした。神戸大学の地域連携事業の一環として文学部が中心になって取り組んでいるプロジェクトのコア・メンバーである文学部助教授の奥村弘氏には、その成果が兵庫県

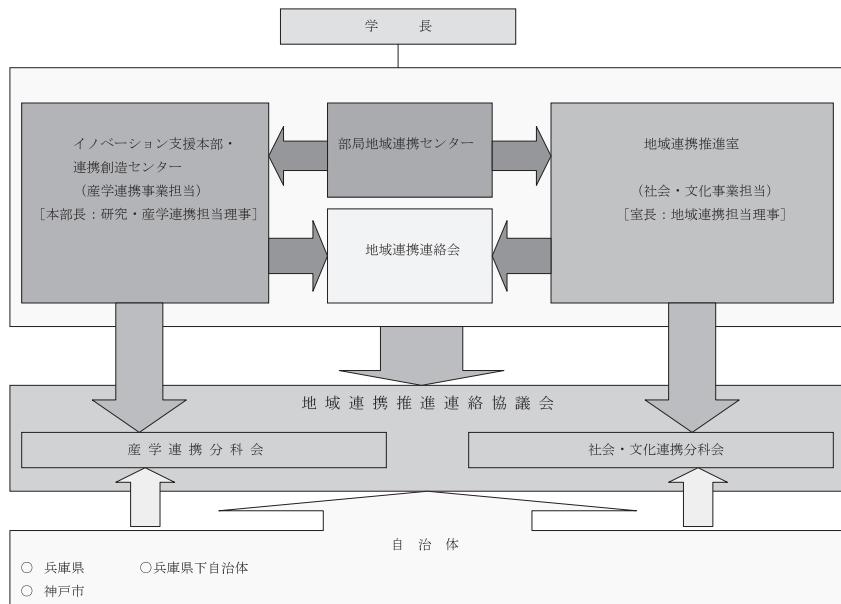
下での地域資源の再確認をツーリズムの場でいかに活用できるかについて意見をいただくことにした。フォーラムへの参加を呼びかけている人たちの中には各地でボランティアガイドとして取り組んでいこうとしている人たちも多くいたので、その人たちにとって有益な示唆が得られるのではないかと考えた。兵庫県城崎町の町長であり、(株)西村屋代表取締役社長である西村肇氏は兵庫県内に六人いる「観光カリスマ」の一人である。国内でも有数の観光地の主張として、また経営者として集客にどのように取り組んでおられるのかを紹介していただくことにした。

年度末に近い時期であるので多少は心配していたが、フォーラムの参加者は150名を超えた。フォーラム会場で収集したアンケートでは好意的な評価が多くたけれどももっと時間をかけてさらに突っ込んだ議論へ展開できなかつたかと反省している。しかし、アンケートで多くの人たちからも寄せられた意見のように、このようなテーマのフォーラムは初めての試みであったので、その全容を取りまとめ紹介することはこの分野の関心の高まり、研究の進展に何らかの貢献が期待されるものであると考え、ここに叢書として公刊することにした。

ここで、地域連携推進室について簡単に説明しておくこととする。

神戸大学では、教育・研究の成果を社会に還元するため、「産官学民連携」を重視して学長が本部長を務める「イノベーション支援本部・連携創造センター」を統括組織として全学の产学連携事業を推進してきた。また地域連携担当副学長を室長とする「地域連携推進室」を統括組織として2003年10月に設置し、その下位に地域連携センター（文学部、医学部保健学科、農学部）など各部局の地域連携事業体による社会・文化に関する地域連携事業を展開してきた。2004年度になって、神戸大学と地域との総合的な連携事業体制が次頁の図のように統合された。この図に見るように、神戸大学の地域との連携事業は今のところ

平成16年度以降の地域連携体制(案)



2 本立てになっている。一方に、イノベーション支援本部・連携センターを通じるものがあり、これを「技術連携」と呼んでいる。他方、「地域連携推進室」を通じるものは、「社会・文化連携」と呼んでいる。後者では、設立当初から全学的な取り組みを目指すとすることから、上に挙がっている部局以外の地域で行われている多方面にわたる連携事業が模索・推進されている。

神戸大学の全学的な地域に対する社会的貢献として、実質的な取り組みを進めるべく、2004年度からは、自然科学系、社会科学系、人文科学系、医学系からもそれぞれ最低各1名の教員が「地域連携推進室」員の辞令を受けた。地域連携推進室会議には地域連携センターのみならず全学的な地域への社会貢献や連携事業が報告されている。各センターごとの取り組みとは別に、全学的に総合大学としての特色を生かした連携事業として、「ツーリズム」を取り上げることに意見の集約をみている段階である。このテーマを決定するに当たって、

議論が行われたが、そこでは出席の室員たちからはそれぞれの専門分野の研究成果を「ツーリズム」で生かす可能性が示唆された。

今後はこの方向に沿った展開が進んでいくことが期待されるのであるが、そのためには「ツーリズム」の現況がどのようなものであるのか、あるいはそれに取り組みたいと考えている地域がどのようなニーズを持っているのかなどについて知識・情報を蓄積・共有する機会を継続的に持つことが肝要であろう。

フォーラムのテープ興しは早い時期に取りまとめられていたのであるが、一部に大変お忙しい方もあり、原稿の最終チェックでかなりの時間を費やすことになった。この間、出版についていくつかの問い合わせもあり、各方面に多大なご迷惑をおかけしたことを深謝する次第である。既に記しているように、このようなテーマの取り組みは始めてのものであり、さらなる取り組みが求められているのであるが、そのためにも多くの方々から忌憚のないご意見をいただきたく思っている。

フォーラムの成果をこのように公刊できたのは、なによりもフォーラムを盛会に催すことができたことに依る。それにあたって、本部との経費配分の折衝など、開催に向けて精力的に取り組んでいただいた山地秀俊研究所長に深謝しなければならない。また、当研究所のスタッフには、フォーラムの開催とこの記録集の発行に対して多大なるお世話になった。あわせて感謝する次第である。とりわけ、シンポジウムの開催に当たっては奥野美奈子氏（当時当研究所研究助成係）、また記録のとりまとめについては田村真由美氏（当研究所リエゾンセンター）および堀田英美緒氏（当研究所研究助成係）の3人の助手の方々にはお世話になったのでここに改めて記しておく。

(参考)

平成16年度 神戸大学「ツーリズム」フォーラム

テーマ：“観光”から“ツーリズム”へ
—多様なツーリズムの可能性を探る—

最近、我が国においても観光がさまざまな観点から注目されるようになってきました。海外諸国とは数十年遅れているとも言われていますが、アカデミックな分野でも同じ傾向にあります。しかし、従来のように「tourism」を「観光」といった捉え方をしていたのでは、その本質にはなかなか到達し得ないと考えられます。「観光」の定義自体が曖昧で、物見遊山、享楽的なイメージがつきまとう中で、兵庫県では2002年に「ツーリズム」という言葉を使い始めました。もちろん、「ツーリズム」の定義も確立してはいませんが体験・交流など多様な「ツーリズム」が模索されている段階です。神戸大学では来年度から文部科学省による「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」に採択され、その中で総合大学の特性を活かしてこの分野にも取り組んでいくことになっています。このような状況下で、第一段階として、多様な「ツーリズム」による地域活性化の可能性を多方面から検討してみたいと考えています。

△

日 時：平成17年3月19日（土） 13:00～19:00

場 所：神戸大学六甲台本館1階 102号室

交流会は神戸大学アカデミア館3F「さくら」

主 催：神戸大学 経済経営研究所

共 催：神戸大学 地域連携推進室

参 加 費：第I部、第II部は無料 交流会は2,000円

定 員：200名（先着順）

申込方法：神戸大学経済経営研究所 研究助成室 奥野美奈子

E-mail: kenjo@rieb.kobe-u.ac.jp Tel:078-803-7036 Fax:078-803-7059

プログラム

開会の辞：13：00～13：10 神戸大学理事・副学長 鈴木 正幸 氏

◎第 I 部：13：10～14：45

基調講演① 「国内外から人が訪れる賑わいひょうごの創出」

兵庫県知事 井戸 敏三 氏

基調講演② 「我が国のツーリズム戦略」

国土交通省大臣官房総合観光政策審議官 鶯頭 誠 氏

◎第 II 部：15：00～16：30

パネルディスカッション 「ツーリズムにおける地域連携の課題」

パネリスト 兵庫県産業労働部長 江木 耕一 氏

(財)日本交通公社理事・観光マーケティング部長

小林 英俊 氏

太成学院大学教授 寺本 光雄 氏

神戸大学文学部助教授 奥村 弘 氏

兵庫県城崎町長・㈱西村屋代表取締役社長

西村 肇 氏

コーディネーター 神戸大学経済経営研究所教授 小西 康生 氏

閉会の辞：16：30～16：40

神戸大学経済経営研究所長 山地 秀俊 氏

◎第 III 部：17：00～19：00 交流会（神戸大学アカデミア館 3 F 「さくら」）

平成16年度神戸大学「ツーリズム」フォーラム “観光”から“ツーリズム”へ—多様なツーリズムの可能性を探る—

日時 平成17年3月19日（土）13:00～16:40

場所 神戸大学六甲台本館1階 102号室

(司会) 皆様、大変お待たせいたしました。ただいまより、平成16年度神戸大学「ツーリズム」フォーラムを始めさせて頂きます。

まずは本日、皆様にお集まり頂きましたこのフォーラムの趣旨について簡単にご説明させて頂きます。神戸大学では、地域連携推進室が設置されて、産・官・学・民でのさまざまな形態の連携による研究に取り組もうとしているところです。神戸大学の地域連携は、自然科学分野を中心とする技術連携、そして社会科学等のそれ以外の分野を中心とする社会文化連携の2本立てで進められています。また、神戸大学は文部科学省による「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」に採択されており、そこでは総合大学としての特性を活かした取り組みを来年度から進めていくことになっております。さまざまなテーマが考えられますが、神戸大学として、ツーリズムに取り組んでいくことになっています。

そこで、今回のフォーラムは、今後の地域連携活動のプレイベントとして、ツーリズムに関する現在の国及び地域の取り組みの包括的な情報を共有するために開催されます。今回に続きまして、国内の具体的な取り組み、あるいは各国による取り組みについて、次回以降のテーマにしたく考えております。

さて、本日のフォーラムは3部構成となっております。第Ⅰ部では、兵庫県知事、井戸敏三様と、国土交通省大臣官房総合観光政策審議官、鷲頭誠様のお二人から、兵庫県あるいは国の取り組みについての基調講演を頂戴したいと存じます。

続きまして、第Ⅱ部といたしまして、15時から5人のパネリストにより、多彩なツーリズムの可能性と、それを進展させるに当たっての連携相手としての大学に期待される役割などについて、パネルディスカッションを行ってまいります。第Ⅰ部と第Ⅱ部では、時間に余裕がございましたら、フロアの方々からもご質問を頂戴したいと思っております。そして、17時からは、第Ⅲ部といたしまして交流会を予定しております。皆様、最後までご参加頂けますようお願い申し上げます。

では開会に当たり、大学を代表いたしまして、神戸大学理事鈴木正幸がごあいさついたします。

開会の辞

鈴木 正幸

神戸大学の理事・副学長の鈴木でございます。開会に当たりまして一言ごあいさつを申し上げます。

本日、兵庫県知事の井戸様、国土交通省大臣官房総合観光政策審議官の鷲頭様にご講演頂きますことを大変光栄に存じます。厚く御礼申し上げます。また、パネルディスカッションに学内外の多数の方々がご参加頂けますこともまことにうれしく思っております。

今日の大学は、教育・研究と並びまして、社会貢献を第三の使命といたしております。本学におきましても、昨年4月に改組しましたイノベーション支援本部・連携創造センターにおいて産学連携を積極的に進めております。また、一昨年10月に設置しました地域連携推進室において、社会文化にかかわる地域連携事業を進めております。

本学は、今ご案内がありましたように、16年度の文科省の「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」の「地域活性化への貢献」分野におきまして、「地域歴史遺産の活用を図る地域リーダー養成」という事業が採択されました。この事業は兵庫県が取り組んでおられますヘリテージ・マネジャー養成事業とも連携して進めることになっております。また、本日のコーディネーターの小西教授の参加を得まして、地域歴史遺産の活用による地域おこしの多様な方法を開発いたしまして、これを学生・社会人教育に応用したいと考えております。そして、この事業に参加している主要なメンバーは、国土交通省が進めておられる国営明石海峡公園の一角である、藍那のいわゆる里山公園事業にも一部参加

させて頂いています。こうしたことが県及び県下市町のツーリズム事業に連携・連動できれば、本学の地域連携事業もさらに前進できるものと信じております。

本日の「ツーリズム」フォーラムが跳躍台となり、新しい地域連携事業が展開できますことを心から念願いたしまして、はなはだ簡単ではありますが、私のあいさつといたします。ありがとうございます（拍手）。

第1章 国内外から人が訪れる 賑わいひょうごの創出

井戸 敏三

皆さん、こんにちは。ご紹介頂きました兵庫県知事の井戸です。こういう大学の演台などに立ちますと非常に緊張しますが、今日は非常に楽しい中身ですので、皆様に助けられながら進めさせて頂ければと思っております。テーマは、「賑わいひょうごの創出」ということにさせて頂きましたが、中身がそうなっているか、どうぞお楽しみください。

1.1 「観光」から「ツーリズム」へ

1.1.1 なぜツーリズムか

まず、「なぜツーリズムなのか」ということから始めさせて頂きます。そもそも従来から「観光」という言葉がよく使われています。申すまでもなく「光を観る」ということですから、「観光」というものをそういう形で捉えていきますと、非常に素晴らしい言葉だと思うのですが、その使われ方は、sightseeing、素晴らしい景色を眺める、ものを見るということだけになって、いわゆる物見遊山が観光だというイメージに捉われてしまいます。しかし、本当はそれだけでなく、仕事、生きがい、あるいは学習であっても、その交流を図っていくことが必要なのではないか、それをもっと広い意味で捉えたらいいのではないかということで、兵庫県では「ツーリズム」という言葉を使わせて頂いています。ですから、いろいろな県では「観光協会」と言っていると思いますが、兵庫県

国内外から人が訪れる 賑わいひょうごの創出

兵庫県知事 井戸 敏三

1 「観光」から「ツーリズム」へ

(1)なぜツーリズムか

成長社会

成熟社会

□ モノの豊かさ

□ こころの豊かさ

旅行形態の変化

- ・「団体旅行」から「家族旅行」へ
- ・「見る観光」から「体験する旅行」へ
- ・シルバー世代(60歳以上)の旅行増加

最近の人気
「安・近・短」の旅と「癒し」「安心」「高級感」の旅の二極化

経済的な豊かさに直結した

観光

人々の交流やまちづくりを重視する

ツーリズム

では「ひょうごツーリズム協会」と3年前に名前を変えまして、私が会長を務めさせて頂いています。

その背景には、やはり成長社会から成熟社会に変わってきたというところがあると思います。何が違うのかということを、成長社会は「モノの豊かさ」、成熟時代は「こころの豊かさ」と書いていますが、成長社会では団体旅行が非常に盛んでした。私なども若いころは職場旅行に参りましたし、ほとんどの企業が集団で旅行に行かれました。土曜日に出掛けていって、真夜中まで大宴会をやって、翌日の朝の食事からビールを飲んで迎え酒だなどと、そういうことが続いていたと思いますが、今はさっぱりなのです。私は静岡県に勤務したことがあり、熱海が団体旅行のメッカだったのですが、今は本当に困っているのです。団体旅行・集団旅行がはやらなくなり、家族旅行・個人旅行、あるいはグループ旅行に変わってきてているというのが今の特色です。

単に見るだけでは飽き足らない。「経験する」「体験する」あるいは「学ぶ」ということが非常に重要になってきています。併せて、今の世の中でお金があつて時間もある人は誰か、と言うと、シルバー世代でいらっしゃいまして、やはりお金があつて時間のある方が出掛けられることが非常に多くなったと言われています。その中でも特に、女性グループの旅行が増えてきています。ただ、女性グループの旅行は、家庭の、特にご主人の理解がないとなかなかうまくいきませんが、そういう女性が出掛けやすい環境をどう作っていくかということがあります。シルバー世代だけではなく、女性のグループ旅行が非常に増えてきているという中で、女性が出掛けやすい環境、例えば男性が一人でも2～3日ぐらいであれば家事、炊事・洗濯程度はやれるようにしていく、男女共同参画が進むような時代にしていかなければいけないと思っております。

最近は、やはり安い旅行と、それから少し高級感のある旅行との二派に分かれているのが実態のようです。いずれにしても、人々の交流を幅広く取り上げていく「ツーリズム」という形で、これから観光を捉えたほうがいいのでは

ないか、そうすべきではないかと考えています。

1.1.2 兵庫県における観光産業の経済波及効果

では、兵庫県ではどれくらい観光産業が占めているかというと、県内の観光消費額は約1兆円、そのうち付加価値としては約6000億円、雇用で13万人、県内総生産の約3.3%を占めています。これは直接効果です。直接効果というのは、旅館やホテルなどに直に払われているお金が約1兆円、それで付加価値が6000億円ほどあるということです。食事の材料や器を買うなど、いろいろなことがありますし、ホテルの従業員の方々がさらにお給料をもらって、そのお給料を使われるということになりますので、そういう生産誘発額が1兆5000億円ほどあります。そして、付加価値誘発額が1兆円ほどある。そして、これに伴って就業者が16万5000人ほど増える。それらを合わせまして、全県での付加価値効果はトータル5%程度と算出しています。

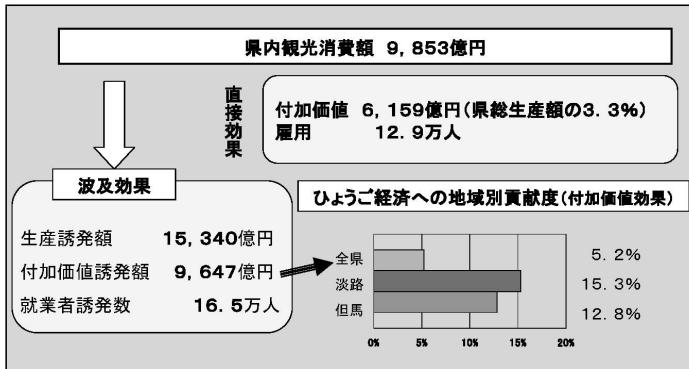
その5%程度ですが、やはり観光地域である淡路と但馬は観光のウエートが非常に高く、淡路は15%、但馬は13%という比重を占めています。これは、やはり観光業が一つの産業として十分に成立する、しかも成長産業なのだということを、特に淡路や但馬では示していると思いますし、私ども兵庫においては、この5%をせめて2倍にする必要があると考えているところです。

1.2 兵庫県はツーリズム資源の宝庫

兵庫県は、北は日本海、そして瀬戸内海を経て淡路島で太平洋に接しています。そして、摂津、丹波、但馬、播磨、淡路の五つの国から成るという非常に特色のある風土を持っています。そして、その特色のある風土を持っているがゆえに、自然、景観、歴史、伝統、文化、産業、生活、それぞれ個性がある地域に恵まれているということだろうと思います。そういう意味では、ツーリズ

1 「観光」から「ツーリズム」へ

(2) 兵庫県における観光産業の経済波及効果



2 兵庫県はツーリズム資源の宝庫

北は日本海、南は瀬戸内海を経て太平洋に面する広大な県土

多彩な地域個性の活用と創造
広大な県土にはぐくまれた

自然、景観、歴史、伝統、風土、
芸術、文化、産業、生活

人、自然、地域 「交流の広がり」

- ①住むところへの関心の高まり
- ②人と人との結びつき
- ③アイデンティティーの確立
- ④無機質な都市生活への反省
- ⑤地域個性や地域資源への期待

地域の多彩な個性を活用し
創造する「ツーリズム資源」

ム資源をたくさん持っているのが兵庫ではないか。実感からしまして、生かし切れていない、これをどう生かしていくかというのが課題だと思います。

私は、今、交流ということに非常に関心が持たれていて、現に交流がかなり大きく取り上げられているのには、幾つかの理由があると思っているのですが、その一つとして挙げられるのは、それぞれの地域に住んでおられる方々の、自分の住んでいるところへの関心が非常に強くなっています。自分が住んでいるところへの関心が高くなるということは、人や地域のよさ、自分の地域の持っているものと他の地域の持っているものとの比較がよくできるようになってきたということで、そういう意識が芽生えているということが一つあると思います。

そしてもう一つは、自分の地域の特性というものを見比べるという意味での、人と人との交流、結びつきが始まったということ、第3番目は、自分たちが何であるのかということに対する関心がかなり高くなっています。『アイデンティティー』と書きましたが、実質的には、自分にふさわしい生活スタイルを確立したいという面が非常に強くあると思うのです。自分の生き様や生き方に対して、非常にみんなが考えるようになってきました。そういうことが、この交流の広がりの基礎にあるのだと思うのです。

もう一つ、やはりコンクリート・ジャングルではもう嫌だ、たまには自然の中に浸りたい、そういう意味での自然との共生の渴望というものがあります。

それともう一つ、ツーリズム資源がたくさんあると言いましたが、自分たちを振り返ってみると、地域個性や地域資源にはいろいろなものがあるのだなと気づき始めた、こういうことが交流のバックグラウンドになっているのではないかと思います。

特に今申し上げた地域個性や地域資源への期待という点では、小学生や中学生に自分のところを知ってもらうということが大事なのではないか。例えば富士山は知っていても、目の前の山の名前を知らない子がたくさんいるのです。

ですから、自分の育っているところ、自分の住んでいるところの景色や山、川などの名前から覚えてもらう、知ってもらう、学んでもらう、こういう活動を展開していくことが非常に大事だと思います。それは、ある意味で体験教育や情操教育にもつながっていくものと思っているところです。

1.2.1 ひょうごツーリズムビジョン（2002～2010年）の推進

私どもは「ひょうごツーリズムビジョン」を2002年に作りました。そして、感動を呼び起こせる兵庫にしていくこうということをキャッチフレーズに、多彩な地域個性を生かそうではないかと呼びかけたのです。

戦略目標として、2005年度、ツーリズム人口を1億5000万人に設定しました。残念なことに、この平成15年度では1億2100万人ぐらいしか達成していませんので、16年度、17年度で1000万人ずつ上積みできるか、ちょっとこの実現の可能性が問われているのですが、いずれにしても1億5000万人を目標に設定しました。

そして、地域の基盤づくりを進めようで、まちづくりとツーリズムを組み合わせて、地域資源の再発見という試み、地域の方々の主体的参画という試み、宿泊サービスの低廉化促進という試み、IT活用という試み、そして、旅行社の皆さんにも協力して頂くようなプロモーション（PR）活動、広域連携を進めよう、そして国際ツーリストの誘客促進、この七つの柱で促進を図ったところです。

1.2.2 地域が連携した「宮本武蔵ツーリズム」の成功

一昨年になりますが、「武蔵」が大河ドラマで放映されました。武蔵の生まれた故郷は、最新の資料によりますと、今の高砂だということになります。しかし、どこで生まれたかということが決め手になるわけではなく、岡山県の大原とタイアップして、武蔵にまさしく便乗して、たくさん来て頂こうという試

2 兵庫県はツーリズム資源の宝庫

(1)ひょうごツーリズムビジョン(2002年～2010年) の推進

目指すべき将来像 《基本コンセプト》

多彩な地域個性を生かしたツーリズム振興
～感動を呼ぶツーリズムひょうご～

戦略目標

2005年度のツーリズム人口
150百万人

①学習、体験、交流型のツーリズム推進

②個性を生かした美しい地域の基盤づくり

- まちづくりへの取り組みと資源の再発見
- 地域住民等の主体的な参画の推進
- 多様な宿泊サービス等の提供による低廉化の推進
- ITを活用したサービスメニュー等の拡大
- 旅行社とのタイアップ等による効果的なプロモーション活動
- 近隣府県との広域連携の推進
- 国際ツーリストの誘客促進

2 兵庫県はツーリズム資源の宝庫

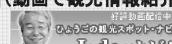
地域が連携した「宮本武蔵ツーリズム」の成功

平福 播磨から作州へ織く街道筋の町。
養母よしこを慕い幼い武蔵が通った。

周辺地域が連携した
地域主導のスリーズム
ひょうご宮本武蔵ツーリズム連携協議会
93事業を実施

加古川市、佐用町、姫路市、
龍野市、明石市、太子町、高砂市、
山陽電気鉄道株式会社、
岡山県 大原町、(社)姫路観光協会 等

「I-do！ナビ」(動画で観光情報紹介)



集客の効果
H14年9月～H15年12月の間に
イベント、関連施設に 345万人



みを実施しました。周辺地域が連携した広域の協議会を作り、岡山県大原町にも入って頂いて、多くの事業を実施しました。私も、「I・do・ナビ！」（イドナビ）というもので動画で出演し、紹介のガイド役をしました。全然ファンレターが来ませんでしたので（笑）、どれだけ効果があったか分かりませんが、ともかく集客効果としては、14年9月から1年半ほどで345万人の効果がありました。

左頁の下図のうち、右上は平福です。武蔵が最初に有馬喜兵衛と戦って勝ったと言われているところです。

下が書写山の圓教寺です。「ラストサムライ」で撮影されて非常に有名になりました。

こういうことが大事なのです。後程、観光カリスマの話にふれる際にあらためてふれますが、撮影場所が今は観光スポットになる。韓流のヨン様が出会った町が非常に有名になりました。こうした撮影場所自体も観光スポットになる、そういう時代を迎えているだけに、書写山などはもう少し売り込みたいと思っているのです。

1.2.3 「義経」への期待、「兵庫津」付近の資源

また、今は「義経」が放映されています。宮尾さんの『平家物語』がベースになっているわけですが、県内にはやはり源平ゆかりの地がたくさんあります。次頁上図中、左上は、香住町の、平教盛（のりもり）が流れ着いたと言われている平家の落ち武者の部落なのですが、面白いのです。「源氏の目」を矢で射るというお祭り（1月末）が残っているのです。

それから、三草山の古戦場があります。平資盛（すけもり）は源義経にこの戦いで負けて、生田の森陣地まで逃げ帰ったという古戦場です。

2 兵庫県はツーリズム資源の宝庫

「義経」への期待、「兵庫津」付近の資源

御崎 平内神社 百手の儀式
香住町、「源氏の目」を矢で射る祭。



三草山古戦場



源平合戦図屏風 一の谷・屋島合戦図
[神戸市立博物館蔵]



多田神社
源氏発祥の地



兵庫津付近の資源



全県に広がる「ゆかりの地」

源平の世を伝えるスポットは、
神戸を中心に、全県に100以上

2 兵庫県はツーリズム資源の宝庫

食の「安全・安心」

八千代町フードツーリズム

グリーンツーリズムによる味覚を通した「訪 れたくなる町・住みたくなる町」づくり

スローフード時代のおもてなし

- ・季節の旬の料理
 - ・家族で訪れる人の癒しの空間
 - ・料理、心、器が一体となった
- 食育と料理**
- ・スローフードによる子供の成長と食育
 - ・伝統的な食材の復活



ふれあいの里 上月

加美町 みつばグループ

右上は「源平合戦図屏風」です。

多田神社というのは川西にある「源氏発祥の地」です。平家だけではないと
いうことを言いたかったのです。

それから、このバスは今、義経や源平のゆかりの地を走っているバスです。

兵庫区には清盛塚、兵庫津の跡（今は兵庫運河）などがあります。

そういう意味からしますと、こういう物語を一つのシナリオにして、名所を
たどることによって一つの歴史や物語が追体験できる、そういうシナリオづくり
が非常に必要なのではないかと思います。

1.2.4 食の「安全・安心」

八千代町のフードツーリズムなど、今、県内各地でいろいろな地域おこしグ
ループが、地域の特産物を使って、このようないろいろな活動をされています。

例えば「ふれあいの里上月」^{こうづき}では、もち大豆を使ってお豆腐など大豆料理を
出されていますし、加美町の「みつばグループ」などは、播磨の地鶏を使った
地鶏弁当や具を販売されていますし、黒田庄の「黒っこマザーズ」というお母
さん方のグループは、それこそ自分たちの地域で採れた産物でお弁当を作って
販売されています。こういうグループがたくさんできています。そのようなグ
ループを訪ねて頂くだけでも、地域地域の新鮮な食材に接しながら、その地域
地域の味を味わうことができます。そのような意味で、これも一つの大きなツー
リズム資源になるのだと強調したいわけです。

そういう意味で、「スローフード時代のおもてなし」と書いていますが、「ス
ローフード」とは何かと考えたときに、やはり地産地消、地域の方々の自主的
な取り組み、その地域へお迎えをするもてなし、この三つが非常に重要な要素
になると思います。

1.2.5 「体験！兵庫」農村体験館「八平」の挑戦

もう一つ紹介したいのが、但東町です。ちょうど京都との境で、去年の台風23号では山麓災害で中山間地が根こそぎやられるような大きな被害を受けたところですが、この「八平（はちべえ）」というところも前のお宅が土石流でやられて、八平さんは何とか助かったのです。この八平さんというのは、6軒ぐらいの地域の農家が共同出資をして、平成9年から「田舎を持たない都会の人にゆったりと過ごしてもらいたい」という意味で、地区の建物を活用して、そして手づくりで、自分たちで整備をして、おもてなしの場を作りました。主としてそば、豆腐やこんにゃく、炭焼き体験、畑仕事まで体験できますよとPRされていますが、とてもおいしいおそばを食べさせてもらいます。

さらに、「グリーンツーリズム特区」として、この但馬全体をグリーンツーリズム特区にしているのですが、特区の理由は、一つは消防法上の規制緩和です。農家民宿をやりたいということで、普通の旅館になりますと、避難路、非常口をきちんと造らなければいけない、「非常口」と書いてあるライトをつけなければいけないなど、いろいろ設備基準があるのですが、それを農家民宿には緩和をしてもらった、そういうものが一つです。

そしてもう一つ作ったのが、「どぶろく特区」です。この八平さんの能勢さん、左がだんなで右が奥さんなのですが、念のために申し上げると、お二人には27歳の子供がおられますのでご想像ください。このどぶろくも、去年12月にようやく仕込みが終わりまして、私も先日頂いてきました。飲みすぎないようにお気をつけてください。口当たりが非常にいいので、どうしても飲みすぎます。もう少し味が、甘いだけではなく、厚みが出てくるといいなというアドバイスをしておいたのですが、しかし、なかなかのものでした。そのどぶろくと併せて、例えば豆腐やこんにゃく、ウドやゼンマイなどの山菜料理を味わう、とてもおつなものでした。

この八平さんと同じような農家民宿が、但東町にあと二つ、竹野町に一つあ

2 兵庫県はツーリズム資源の宝庫

「体験！兵庫」 農村体験館「八平」の挑戦

「グリーン・ツーリズム」を地域の活性化に 日常的な農山村での暮らし 観光客にとっては無限の喜び

地域の共同出資でH9誕生
・「田舎を持たない都会の人へ ゆったりと過ごしてもらいたい！」
・地区の建物活用、手作り整備
(開業の知識は皆無、許認可の壁)

地域の誇り
暖かな雰囲気、人
(地域のホスピタリティ)

体験内容
・そば打ち
・豆腐づくり
・煙仕事 他
・こんにゃくづくり
・炭焼き体験
・どぶろく製造販売開始

グリーン・ツーリズム特区活用

2 兵庫県はツーリズム資源の宝庫

自然再生へ 上山高原エコミュージアム

人工林の植林やスキ草原のササ化による 生態系の喪失
集落と自然との関係の喪失

まるごと生きた博物館
昭和30年代ごろの状況を目標に
「スキ草原の復元」「ブナの森の復元」

ブナ林、スキ草原、イヌワシ、ツキノワグマ
貴重な生態系の維持
人と自然が調和した「暮らし」の提案

り、今、但馬で、四つ農家民宿がスタートしています。このような農家民宿あるいは既存の家を改造した宿泊や、あるいは地域料理でもてなすという方向は、さらに強まっていく、取り組む方が増えていくのではないか、また、そのような需要も非常に多くなってきて、都会の人たちも訪ねたがっておられる、そのように思っています。

1.2.6 自然再生へ 上山高原エコミュージアム

それから、上山高原はちょうど鳥取との境の温泉町で、『夢千代日記』で有名になった湯村温泉があるところです。湯村温泉から南に入った氷ノ山の山麓地域ですが、ここはブナ林が非常に素晴らしいところです。そのブナ林の復元と、ススキの草原の復元をベースにしながら、イヌワシがいることもあり、自然をそのまま残すエコミュージアムにしていこうということで整備しています。

ご多分に漏れず、バブルのころに、ここに高原都市を整備しようという計画を書いたことがあったのです。その高原都市整備構想、私は副知事に就任して、早くこの高原都市を整備してほしいという要望を随分ここから受けまして、一度見に行きました。こんな素晴らしいところを高原都市などにする必要は全然ない、そのまま自然を生かしたエコミュージアムにしていった方がよほどいいということで、地元の人とも相談しながら方針替えをして、逆にススキ草原を復元したり、ブナ林を整備したりして、自然に親しんでもらう空間に整備しているところです。

少し残念なことに、この道をぐるぐると歩きますと鳥取県側に行くのですが、鳥取県側に牧場が整備されてしまって、牧場高原の横に出てしまうのです。それでも整備された牧場、残された自然、二つセットにしてみると、そういう意味では売りになるかなと思っているところです。

1.2.7 人と自然と文化が調和した「森の都」創造をめざす「丹波の森構想」

次に、こういうものがやはり地域づくりの基本なのだろうなという意味で紹介させて頂きたいのが、丹波地域です。「丹波の森構想」といいまして、丹波に大きな森があるわけではないのですが、丹波地域全体を大きな森だと見立てて、森の中に自分たちの生活の場を作つて整備していくこう、その中で暮らす人々の生き様を皆さんに見てもらおうというものがあります。

その中で、ユニークなソフトの試みの一つとして、「丹波の森国際音楽祭 シューベルティアーデたんば」というものを、平成7年から、もう10回の開催を重ねてきております。シューベルトさんのお孫さんも3回ほどお呼びして、街角コンサートから始まって、最後は大きな大コンサートで終わるお祭りを、3か月ほどかけて地域全体を挙げてやっています。

これに併せまして、この2年間ほど準備して、「おさん茂兵衛 丹波歌暦」という市民オペラを準備してきました。昨日（3月18日）第1回公演をして、明日（20日）・明後日（21日）と3回公演をします。これは何かといいますと、たまたまこの近松門左衛門原作の「大経師昔暦」の主人公がおさんと茂兵衛、この二人は丹波出身という設定になっておりませんので、この物語をオペラ化したというものです。私は21日に見ることにしているのですが、非常に楽しみにしています。

また、去年3月には、「おさん茂兵衛号」という列車を尼崎から走らせました。私も物好きですから、ちゃんと乗つて、柏原の駅まで皆さんと一緒に行きました。

そういう、いわば手づくりのオペラが丹波で行われていることがうれしいのですが、この秋に、西宮北口に県の芸術文化センターがオープンしますので、そちらの舞台を使って頂いて、来年3月に阪神間に売り出すということになります。きっと評判を呼んで、全国発信できるのではないかと期待しています。

2 兵庫県はツーリズム資源の宝庫

人と自然と文化が調和した「森の都」創造をめざす「丹波の森構想」

2 兵庫県はツーリズム資源の宝庫

県内に6人の観光カリスマ

北海道、長野県、沖縄県と並んで全国トップ

細尾 勝博(八千代町産業課長)
 上坂 卓雄(出石城下町を活かす会元会長)
 西村 肇(城崎町長)
 田中 まこ(神戸フィルムオフィス代表)
 金井 啓修(有馬温泉旅館「陶泉 御所坊」主人)
 井上 重義(日本玩具博物館館長)

1.2.8 県内に6人の観光カリスマ

兵庫県内には「観光カリスマ」と呼ばれるリーダーが6人いらっしゃいます。八千代町の産業課長さんの細尾さん、先程のいわば地産地消、あるいは地域の方々の新しい取り組みや特産物を掘り起こして観光資源に仕立て上げた張本人です。

それから上坂さんは「出石城下町を活かす会」の元会長です。出石は1年間に今100万人ほどの観光客が訪れていますが、城下町で最近ベニヤ板のお城を一夜城で造り上げて、また評判になっておりました。尼崎でも一夜城を試みてもいいのではないかでしょうか。「尼崎のお城を復元したい、復元したい」と言うだけでなく、行動が大切だと思うのです。出石でこうしたことをリードしているのが上坂さんです。それから、今日ここにみえている城崎の西村町長には、あとでお話を聞きください。また、神戸フィルムオフィスの田中まこさん。「わかば」などの撮影場所にはよくアドバイスをされています。また、有馬の御所坊の金井さんは、新しいスタイルの温泉旅館を打ち出しています。そして、香寺の日本玩具博物館長の井上さんです。

観光カリスマは全国で100人で、そのうちの6人を兵庫県が占めています。その割にはもう少し「観光県兵庫」というふうに売り出してもらわないと困るなど、ご協力をよろしくお願い申し上げたいと思いますが、しかし、今紹介しただけでも随分それぞれの方々は違いますね。同じような分野で同じように活躍されているのではなく、違った面で違った活動をされてカリスマになられている。これは非常に心強いことだと思います。

1.2.9 震災10周年記念事業「愛・元気ひょうご」

「愛・元気ひょうご」発信事業というものは、被災地の10市10町の観光協会が連携して、10周年ということもありますので、もう一度被災地の復興ぶりを見て頂こうということで、共同キャンペーンを張った事業です。

俳句を作つて頂きました。「震災の訣れと出会いひ水温む」、これが特選になりましたが、何となく10年の時の歩みと、我々の努力と、そして復興への期待というものがよく詠まれている歌ではないかと思います。

1.2.10 ひょうごの安心温泉「温泉ツーリズムの推進」

それから、安心温泉「温泉ツーリズムの推進」ということで、この温泉は本物なのか本物でないのか、随分議論になりました。その結果、加水、加温、入浴剤または消毒、循環等についての状況及びその理由については環境省の省令改正で内容を表示しなければならないことになったのですが、それに加えて兵庫県では、温泉を利用していない浴槽かどうか、適応症はどうか、温泉の特徴や魅力はどうかということを、必ず脱衣所に、あるいは個室でしたら個室の脱衣所に掲げてもらうことにしました。そうすると、もう温泉情報はすべて開示されたことになると考えています。兵庫県には70の温泉地があり、有名な温泉地もたくさんあります。温泉情報を開示することによって、魅力を十分に味わってもらおうということです。

私は「温泉情報開示施設の証」を「丸適マーク」ならぬ、どう言えばいいのかと今検討しているのですが、情報の提供だから「丸情マーク」とか、あまりさせませんか。では、温泉だから「丸温マーク」とか、いずれにしても分かりやすく、カウンターに掲げて頂きます。ですから、「安全な施設ですよ」という「丸適マーク」の横にでも掲げて頂いて、「ここの温泉は、このホテルはきちんと情報開示をしているホテルですよ、温泉ですよ」ということを皆様と一緒に進めていきたいと考えています。

2 兵庫県はツーリズム資源の宝庫

震災10周年記念事業

「愛・元気ひょうご」発信事業

被災10市10町の観光協会等が連携
兵庫の“今”と「元気ひょうご」の魅力アピール

①「震災の記憶と旅立ち」文芸作品選定
②「私のおすすめ観光スポット」投票事業ベスト10選定
③「震災メモリアル・モデルルート」20の提案

全国に語っていく「震災ツーリズム」提案

「愛・元気ひょうご」発信事業選定委員会
委員長 田辺真人（園田学園女子大学教授）
委員 有持繁（郷土振興調査会参与）
伊丹三樹彦（俳人：現代俳句）
玉岡かおる（作家）
安水稔和（詩人）
山田弘子（俳人：伝統俳句）

震災の
訣れと出
会ひ温
む

2 兵庫県はツーリズム資源の宝庫

ひょうごの安心温泉「温泉ツーリズムの推進」

ひょうごの温泉情報の開示について

兵庫県は、西日本でも有数の温泉県
有馬、城崎、湯村、洲本、宝塚、赤穂、塩田等
県下に70の温泉地

○ 魅力を十分に味わっていただくためには
温泉情報の開示が大切
開示施設には「温泉情報開示施設の証」

【開示項目】

①加水の状況及びその理由
②加温の状況及びその理由
③入浴剤または消毒の状況
及びその理由
④循環等の状況及びその理由
⑤温泉を利用してない浴槽
⑥適応症
⑦温泉の特徴・魅力

1.3 国内外から人が訪れる賑わいひょうごの創出を目指して

1.3.1 地域ぐるみのホスピタリティの向上

それから、10月を「ひょうご・おもてなし月間」ということで、兵庫のおもてなしの心を示すキャンペーン月間にしております。

ただ、問題はタクシーです。どこから来た人も、タクシーのマナーの悪さ、特に神戸のタクシーのマナーの悪さにへきえきすると言われています。そのために一生懸命研修をしているのですが、なかなか徹底していないというのが実情です。結局お客様が少ないので大物ねらいをし、小さいところでこちよこちよ走るのが嫌だということになるという悪循環が続いています。ですから、やはり最初の顔がタクシーですので、タクシー業界の皆さんに協力を得なければならない、そのための努力もしているところです。

国際ツーリストへのタクシー対応につきましては、国際都市神戸なのに、意外と外国語に強いタクシーの運転手さんが少ないのが実情です。また、外国人に対しては乗車拒否のような形で出てしまうおそれがありますので、ひょうごツーリズム協会にインフォメーションデスクを置き、いざとなったら携帯電話をかけてもらい、そのお客様とお話をしてもタクシーの運転手さんにつなぐ、そんなサービスもしていますが、やはりもっと外国語に強いタクシーの運転手さん、あるいはもう一人助手をつければいいのです。ボランティア組織のようなものを作り、観光案内のガイドさんプラス通訳さん、あるいはガイドさんを兼ねたような通訳さん、そういうものを作り、いざというときにお手伝いをして頂くような対応も必要なのではないかと考えているところです。

1.3.2 広域ツーリズムの推進

広域ツーリズムには関西全体で取り組んでいますが、いちばんいい例は、あのSARS騒動を起こした台湾人医師のグループです。関西空港に入って、大阪

3 国内外から人が訪れる賑わいひょうごの創出を目指して

地域ぐるみのホスピタリティの向上

- 「ひょうご・おもてなし月間」(H16~)
- 毎年10月は「ひょうご・おもてなし月間」
地域のホスピタリティをアピール
- 接遇研修の実施
- 国際ツーリストへのタクシー対応

ホスピタリティ 3つのステップ

- ① 明るく、お出迎え
- ② お気持ちをくみとろう
- ③ 心をこめて、お見送り



「おもてなしのまちづくり」
を地域全体へ広げていく

3 国内外から人が訪れる賑わいひょうごの創出を目指して

広域ツーリズムの推進

- ・交通基盤の整備
- ・旅行者の行動範囲の広がり
- ・海外からの旅行者の増加

→ 広域的な取り組みが必要

関西圏の連携

- ・関西広域連携協議会
- ・関西国際観光推進センター
- ・歴史街道推進協議会

近隣県との連携

- ・岡山県、鳥取県、徳島県との連携によるツーリズムバス事業
- ・共同パンフレット(韓国語)作成(岡山県)
- ・因幡・但馬広域観光キャンペーン実行委員会
- ・北近畿広域観光連盟(京都府、福井県との連携)



に泊まって、京都を見物して、天橋立まで行って、その近くに泊まって、出石に入って散策したあと、姫路城を見て、そこから小豆島に渡って、小豆島に泊まって高松へ出て、栗林公園を見たうえで、大鳴門橋を通って淡路島に入って泊まって、そして淡路島から関空へ行って台湾に帰られたという3泊4日のコースです。つまり、それだけ皆さん広域的に動かれているのです。そういう意味では、そういう広域コースをたくさん作ってPRしていくことの必要性が一つあります。

それと、この間の「領事館サミット」で聞いたのですが、ヨーロッパの旅行案内のパンフレットには「ジャパン・ツーリズム」については何も書いていないそうです。タイのプーケット島など、拠点の内容紹介などがあったり、ツアーが組まれたりしているのに、日本ツアーが何もないというのが実情のようです。

そこで、我々としてはもう少し広域的に日本ツアーへの取り組みを強化していく必要があるのではないかと考えて、本物の日本を兵庫で体験してもらおうと「オーセンティック旅館」「フレンドリーイン」「フレンドリーレストラン」という三つのキャンペーンを進めています。「オーセンティック旅館」と称して登録して頂いているのは、外国人の方でもゆっくり泊まって頂ける温泉旅館です。また、「フレンドリーイン」は少し低廉で泊まれる宿屋です。「フレンドリーレストラン」は、外国人の方々に安心して利用して頂けるレストランで、ホームページ等で紹介していますが、なかなか普及しておりません。初めて聞いたというような顔の方ばかりですから、もう少し我々もPRをしていかなければいけないと思っています。

こんな形でいろいろな努力をさせて頂いていますが、特に広東省は私どもと友好提携省ですので、広東省との連携を強くしていきたいと思います。先日、財界セミナーに王毅中国大使が見えましたが、中国の方々は国外に3000万人出ていますが日本に来ている人は60万人ということで、もっと日本に中国の人たちが訪ねてもらえるような努力も、中国側でもしたいけれども、日本側でも努

3 国内外から人が訪れる賑わいひょうごの創出を目指して

国際ツーリズムの推進 一本物の日本を兵庫で体験ー

オーセンティック旅館
フレンドリーイン
フレンドリーレストラン

国際ツーリスト受け入れ拡大に向けて
多様な宿泊メニューを提供。

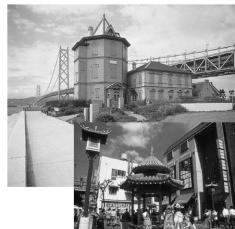
海外からの教育旅行の誘致

ひょうごツーリストインフォメーションデスク(TID)

多言語での情報発信

海外からの団体バスへの一部助成

広東省との連携



3 国内外から人が訪れる賑わいひょうごの創出を目指して

新しいツーリズムの魅力

地域の魅力を創出し、兵庫の文化、自然、まちなど多彩な資源を
生かした交流の推進

兵庫県立芸術文化センター(西宮)



尼崎21世紀の森構想



兵庫陶芸美術館(仮称)(篠山市今田町)



「鉱石の道」構想



力してくださいというお話がありました。

それだけではありません。観光ビザの発給が今まで、最初は北京だけでしたが、上海でも出るようになり、今は広東省広州の総領事館でも観光ビザの発給を取り扱っております。これも我々は外務省と相当交渉しまして、職員を一名派遣し、発給事務を行っているところです。

いずれにしても、向こうの旅遊局や観光局と組みまして、行きか帰りか一度は兵庫に寄っていってほしいという運動を続けているところです。

1.3.3 新しいツーリズムの魅力

何も観光名所だけではなく、私どもは文化活動それ自体も有力なツーリズム資源だと考えています。「尼崎21世紀の森構想」などは、19世紀は葦（よし）に覆われた茅渟（ちぬ）の海の湾奥部、20世紀は埋立地の鉄工所として使われた土地、それを21世紀の我々はこういう森に返して22世紀にバトンタッチしたい、そういう息の長いプロジェクトを進めています。また、「鉱石の道」は、明延鉱山・生野鉱山とを結ぶ、神子畠選鉱場等も含めた道ですが、その生野鉱山から姫路の飾磨港に馬車で鉱石を運んで、飾磨港から製鉄所に出していました。そういう「銀の馬車道」と「鉱石の道」をつなげて、一つのツーリズム資源にしようと考えているところです。

それから、産業ツーリズムということで、中国など外国の方々は工場見学をしたいと結構おっしゃっていますので、工場見学をしやすいように、産業ツーリズムの登録をして頂き、補助金付きのツーリズムバスを出したり、それから受け入れ、つまり白線を引いたり、危険ではないように手すりを造るような場合に助成金を出したり、あるいは産業ツーリズムアドバイザーとしていろいろなアドバイスを頂く、こんな仕掛けを用意しているところです。

国内外から人が訪れる賑わいひょうごの創出を目指して

新しいツーリズムの魅力

産業ツーリズム

兵庫県の強み＝産業技術（基幹産業、先端産業、伝統産業）を生かす

青少年のものづくり・技術への理解を高める

《実施事業》

- ・産業ツーリズム登録施設数 228
- ・ひょうご産業ツーリズムバス 120台
- ・見学者受入体制整備支援事業 30件
- ・産業ツーリズムアドバイザー設置




国内外から人が訪れる賑わいひょうごの創出を目指して

効果的プロモーションの実施

マイクロソフト社との連携
復興10周年事業、マイクロソフト社と連携し、「元気兵庫」の情報発信を展開中

女性誌とタイアップした新たなトレンドづくり
女性誌の持つ、トレンド提案力を活かして、ヤングアダルトをターゲットに、ストーリー性のある「ひょうご」の魅力を発信予定

波及効果



1.3.4 効果的プロモーションの実施

マイクロソフトとの提携は、マイクロソフトのホームページの最初に兵庫県の震災10周年記念事業を載せてもらっています。これはかなりのアクセスがあります。

もう一つは、女性誌などとタイアップした新しいトレンドづくりです。例えば夏に六甲アイランドで開かれている「神戸コレクション」のファッションショーなどは、25歳以下の若い女性ばかりが6000～7000人、六甲アイランドに集まるのです。しかも3000円の入場料を払ってです。その2時間ぐらいのために、全国から集まってくるのです。

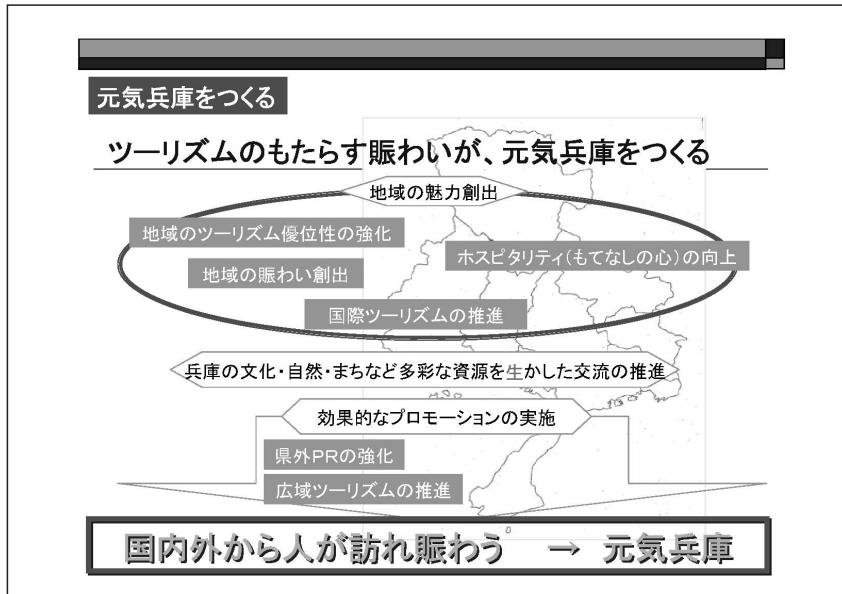
ということは、関心があるものに対しては、今の方々は非常に貪欲、行動的ということだと思います。そういう意味では、私は地域資源と地域文化とをどう結びつけて発信するか、その発信力によって、大きな関心、大きな固まりを作作ができると考えているところです。

この間、兵庫県公館を使ったファッションショーもさせて頂きました。このときは入場料5000円で、昼と夜の2部制でしたが、立ち見席までいっぱいでした。つまり、上手にコーディネートできれば、非常に多くの方々を地域に呼び寄せられるということの証左ではないかと思います。

1.3.5 元気兵庫をつくる

そのような意味で、地域の資源を生かす、それからやはり「おもてなしの心」を持って、「賑わい」というソフトを付け加えることによって、兵庫の文化・資源・まちなどを生かした交流の推進が図っていけるのではないか、そのような意味で、国内外から人が訪れて賑わう元気兵庫を目指したい、このように考えている次第です。

ご静聴ありがとうございました（拍手）。



第2章 我が国のツーリズム戦略 －観光の現状と国際競争力のある観光地づくりへの取り組み－

鷲頭 誠

皆様、こんにちは。国土交通省大臣官房総合観光政策審議官の鷲頭と申します。井戸知事のほうから兵庫県の観光振興についてのお話がありましたが、私には国の観光政策全体について話をしてくれということで、データなども含めて資料を用意してきましたので、ご説明させて頂きたいと思います。

最初に、全般的に日本の観光の状況をご説明したうえで、日本人の観光はどうか、あるいは今言われております外客誘致の状況についてご説明させて頂きます。

2.1 我が国の旅行消費額の推計と日本人の観光動向

まず、我が国の旅行消費額が約24兆円と言われております。これは消費額のベースですから、旅に出て、食事をして、そういうものの全体を足し上げたものが24兆円ぐらいになるわけで、圧倒的に日本人が国内で旅行をして使うという額が多くなっております。

「訪日外客旅行消費額」が1.4兆円あるわけですが、この1.4兆円が、外国のお客様が日本に来てくれて国内で使ってくれた額です。1.4兆円も結構な額ではないかという声もありますが、実は、この1.4兆円を増やしていくというのが観光立国としての政府の考え方です。

ちなみに、この24兆円はほかの産業と比べてどの程度の規模かということで



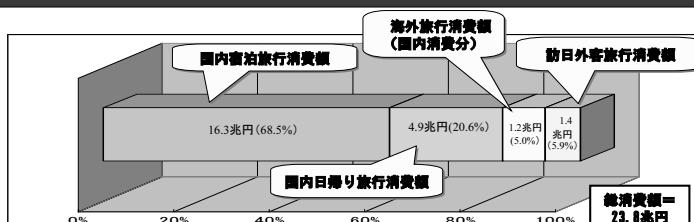
「我が国のツーリズム戦略」

観光の現状と国際競争力のある
観光地づくりへの取り組み

平成16年度 神戸大学「ツーリズム」フォーラム
3月19日(土)

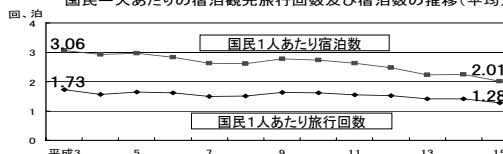
国土交通省 総合観光政策審議官 鶩頭 誠

我が国の旅行消費額の推計と日本人の観光動向



(出典)国土交通省観光部調査

国民一人あたりの宿泊観光旅行回数及び宿泊数の推移(平均)



資料:国土交通省調査による

-1-

ですが、実は、この旅行消費額をGDPに計算し直してみると、GDPでの寄与率が約2.4%になります。その2.4%というのは、自動車産業が大体同じような比率ですし、食料品全体もほぼ同じような数字ということで、産業の規模としても大変大きな数字です。それから、自動車などですと、自動車の関係の人しか消費が回らないのですが、旅行になると、家を出てから電車・飛行機などに乗って、お昼を食べて、どこか観光地を見て泊まって帰ってくるまで、大変広い産業への影響があるという意味で、非常に波及効果の大きい産業であると言われております。

また、観光産業に直接雇用されているのは210万人ほどですが、波及効果も入れて、雇用効果で見ますと、440万人ほどがこの観光産業に関わっていると言えます。そういう意味では、大変大きな波及効果のある産業であると言えます。

私どもが、国民の皆様がどのように旅行しておられるかを取ったデータ（国民一人あたりの宿泊観光旅行回数及び宿泊数の推移（平均）国土交通省調査による）を見ると、一人あたりの宿泊数が平成3年に3.06泊だったものが、平成15年には2.01泊に下がっています。これが実はいろいろなところで問題になっていて、なぜそんなに減っているのかというと、いろいろ説はあるのですが、例えば高速道路ができる、非常に航空ネットワークが発達する、新幹線もできるなど、大変便利になることによって、2泊かかったものが1泊で済む、あるいは3泊だったものが1泊で済むという旅行形態になってしまふところに、この宿泊が減ってくる原因があるのではないかと言われております。

それに呼応するように、例えば温泉地でも日帰り入浴制度のようなものができる、手軽に温泉に入ってその雰囲気を楽しんで帰るというようなこともできますし、あるいは日帰りバスツアーなどといって、朝早くバスで出でていって日帰りするようなこともできるようになって、その結果このような状況になっているのではないか。結局、観光客に通り過ぎられて困ってしまう観光地が増え

ることになりますが、実際のところ、そのような観光地が随分あります。

したがって、国の政策としてこういう状況をどう解消するのか、どうやってお客様にそこで食事をしてもらうなり、泊まってもらうなり、楽しんでもらうような仕立てをするかというところが、その政策としてありうるところではないかと考えております。

2.2 訪日外国人旅行者数及び日本人海外旅行者数の推移

日本は戦後大変厳しい時代があったわけですが、1964（昭和39）年に海外旅行が自由化されています。だから昭和39年以降、海外にどっと観光旅行で出られるようになり、それまで行きたくても海外に行けなかった旅行者や海外旅行に対する欲求などが高まっていたこともあり、日本人の海外旅行は40年代を通じて一気に増えました。

ちなみに、昭和39年には、海外に出る日本人は12万8000人でしたが、海外から来る外国人は35万3000人ということで、海外から来るお客様のほうが、海外へ出る日本人よりも多かった。この辺が原点ですが、その後どんどん伸びていきまして、2000年にはアウトバウンド（海外へ出た日本人）が1800万人、来られる外国人のお客様が500万人ぐらいまでに伸びてきています。

この中で、日本政府は、日本人の海外旅行者数を増加させるという、他国が行う観光政策とはまったく違ったユニークな政策を掲げ、「テンミリオン計画」というものを行いました。1980～1990年のあたりで日本人の海外旅行がグッと伸びておりますが、その部分がこの「テンミリオン計画」によって達成されたわけです。

ちょうどそのころ、日本はアメリカとの間で一番激しい貿易摩擦があった時代で、何とか日本は黒字を減らさなければならないという外圧がありました。その一方で、日本人が外に出てみたい、今まで外国に行ったことはないけれど

も一度は行ってみたいという希望がすごく強かった時代でもありました。そこで、日本人の国際化というものを、外国の方々に来てもらって日本の中で交流することによって国際化するのではなく、日本人に外国を見てもらい、外国を経験してもらって、日本人を国際化していくこうというような考え方、つまり、黒字減らしと、国際化を外国に行ってやるという考え方で、「テンミリオン計画」が作られました。この計画は1987年に発表されたのですが、その前年には500万人の日本人が外国に行っていました。それを5年間の1991年に1000万人にしようというのが「テンミリオン計画」でした。

その政府の方針は、1990年に1099万人と、実は予定より1年早く達成されました。それはなぜかというと、まさに海外に行きたいという日本人のニーズと、黒字減らしという政府の方針、エアラインや旅行会社などのニーズ、すべてのベクトルが同じ方向だったものですから、大変うまく効きました、1年早く一気に達成できたわけです。そういう意味では、日本人のアウトバウンド（海外旅行）に関しましては、2000年ぐらいまで大変順調に伸びてきていると言えます。

ところが、その後、米国の同時多発テロやSARSなどがあり、いったん落ちてきています。2004年は1700万人ぐらいまで再び戻ってきておりますが、以前のような伸びがないという状況です。テロやSARSの影響はあるのですが、これもいろいろな人のいろいろな意見があります。一つ言われているのは、今、日本の社会は、昔のように海外旅行、海外に日本人が出てみたいというニーズは薄れてきているのではないかということです。むしろ今はほかのいろいろな楽しみが社会にあるわけで、海外旅行が唯一の一番貴重な楽しみということではない社会になってきているということです。そういう中で、海外に行っていろいろ見聞きして経験していくことが楽しみの一つの候補として出てくるわけですから、旅行会社の皆さんも、今こういう新しい競争力のある旅行をいろいろな商品として作ろうという方向にあります。実際に、2000万人という

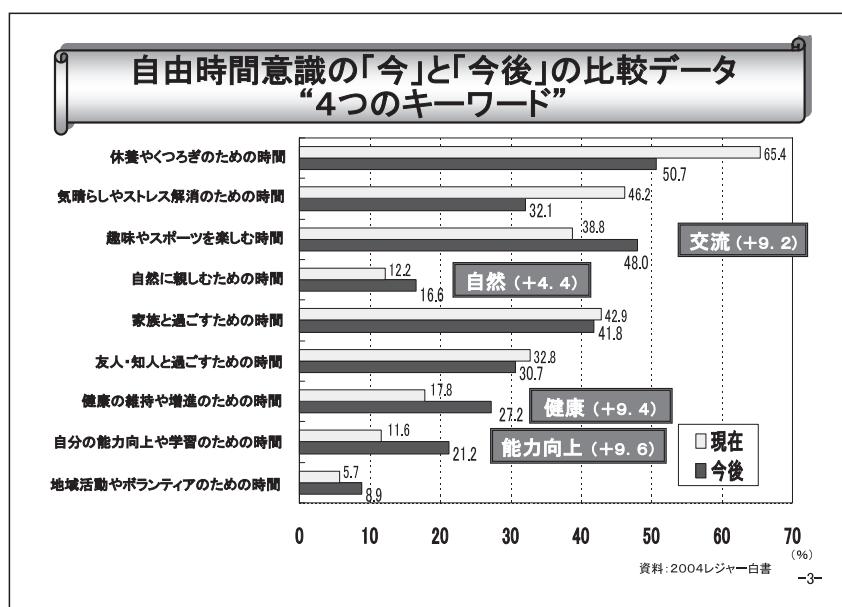
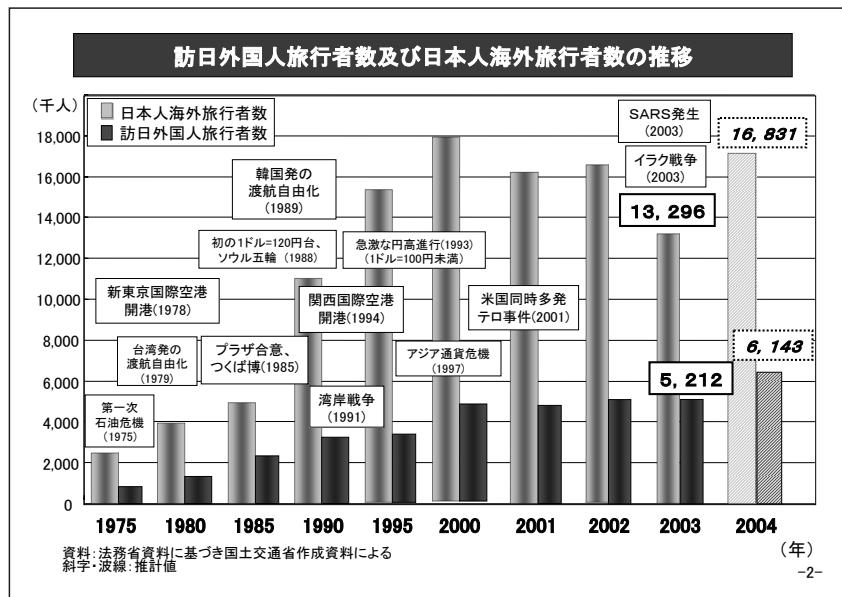
目標で日本旅行業協会の皆様は頑張っておられます、今までのように、パック商品なり何なりを作れば海外に行くということではなく、もう少しほかの楽しみとの中で魅力のあるものにしていかなければならないということだと思います。

一方、外国から来るお客様への対応については、日本人が海外へ出ることによって国際化をしようという人がいたぐらいなので、今まで政府はあまり力を入れていませんでした。その結果、大変少ない状況で推移し、日本人海外旅行者数の3分の1や4分の1という状況になり、最近になってこれをもう少し増やしていくべきであると、「観光立国」という政府全体の政策につながってくるわけです。これにつきましては、またあとでお話をさせて頂きます。

2.3 自由時間意識の「今」と「今後」の比較データ “4つのキーワード”

そういう中で、今、日本人の旅行に対する意識の変化を表すデータの一つがこれです。「2004レジャー白書」に出てくるのですが、端的に表されているのは、今何をしたいかというのが上の薄いほうの棒で、今後やるとしたら何をしたいかというのが下の濃いほうの棒です。今はとりあえず寝てみたいという人も、今後何をしたいかで増えているものが四つあります。

「趣味やスポーツを楽しむ時間」「自然に親しむための時間」「健康の維持や増進のための時間」「自分の能力向上や学習のための時間」になっており、今までの旅行というと、国内旅行も海外旅行もそうですが、ともすれば有名観光地を団体で巡るようなことで、今でもそういう部分はかなりあるわけですが、これからは情報もいろいろなルートで入ってくるということもあり、単に見て回るだけではなく、こういう交流や、自然と触れ合う、あるいは健康を自分で高める、自分の能力を向上させる、このようなことが求められています。



2.4 観光カリスマ

これに対して政府としてどのようなお手伝いをするかということで、そのやり方の一つが右に出ている「観光カリスマ」です。観光振興は、いろいろなところでいろいろな方が取り組みをしておられるわけですが、同じようなことをやっても、成功している人とあまりうまくいっていない人がいて、そういうときにサクセスストーリー（成功事例）を紹介してあげることによって、ほかの人たちも学んで、自分でもそういう道に進むことができる。そのような紹介が我々の行政としての仕事なのではないかということで始めたもので、「観光カリスマ」は、もうすぐ100人になります。

何人かのカリスマをご紹介させて頂きますと、例えば吉田さんは体験型の旅の草分けの方だそうで、実際に消費者に食の安全意識を伝えることや、あるいはソーセージづくりを体験してもらうということで成功されました（能力向上）。

後藤さんは、つぶれかかった黒川温泉を、幻想的な洞窟を造ったり、いろいろなキャンペーンをして、観光地としては大変活性化された温泉に導かれた方です（健康）。

黒木さんは「ワーキングホリデー制度」を日本で初めて導入された方です。訪れた方には4日働いてもらって、ちゃんと給料を払い、あの3日間はお客様として泊まってもらって、お金を払ってもらって、そこでエンジョイしてもらうというプログラム「ワーキングホリデー制度」で大変成功を収められました。（交流）。

竹盛さんは沖縄の竹富町の方です。西表島は石垣島の隣にありますが、それまでは船で来て、バスか何かで見て、また石垣島に帰るというような旅の形態でした。しかし、バスでうろちょろすることによって排ガスやごみが出て、あまりいいことがなかったので、滞在してエコツーリズムを楽しんでもらう、つまり、バスにも乗らず、森の中を歩いたり、自然を観察したりするという、自

“4つのキーワード”による観光カリスマ事例

能力向上

「企業的農業経営による地域ブランド、農村交流ネットワーク構築のカリスマ」
吉田 勝（三重県阿山町）

消費者の農業を知りたい、考えたい、感じたいといふニーズを実現する場をつくるため、農畜産物の手づくり体験や情操教育の場の提供等に取り組み、「工房公園」(ファクトリーフーム)モクモク手づくりファームを開設。消費者と生産者との交流人口の増加や地域の活性化に貢献。

健康

「癒し空間演出のカリスマ」
後藤 哲也（熊本県南小国町）

幻想的な洞窟風呂や露天風呂、樹木の配置等への気配りなど、リラックスできる空間を演出し、癒しとくつろぎを求める顧客の心を捉え成功。また、温泉街の樹木の植栽、配置に手を加え、自然豊かな素朴な風景にそぐわない看板の撤去など、統一感ある街並みと素朴でくつろげる雰囲気作りに取り組み、黒川温泉郷全体の活性化に貢献した。

交流

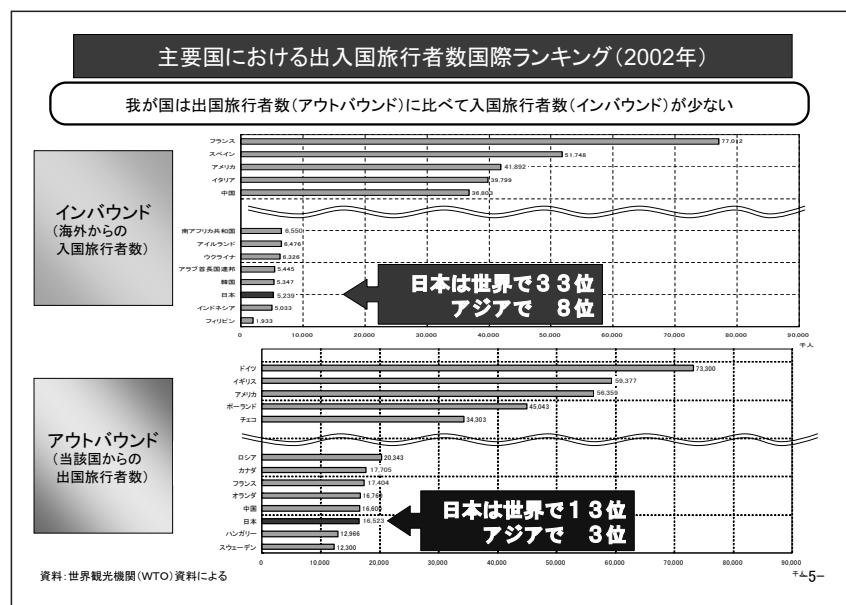
「新しいワーキングホリデー制度」
のカリスマ
黒木 定蔵（宮崎県西米良村）

参加者が農業体験を仕事として4日間手伝い、残りの3日間は西米良の豊かな自然での休暇を楽しんでもらうといったプログラムを組むなど、賃金を支払ってきちんと仕事をしてもらしながら休暇と交流を楽しんでもらうワーキングホリデー制度を導入し、村民の自主的な取り組みによる村の活性化に貢献。

自然

「地域主体で自然の保護と活用の両立を実践するカリスマ」
竹盛 洋一（沖縄県竹富町）

西表島において、「自然を守り、利用する」という考え方の下、島で行われる観光を豊かな自然との共生を図るエコツーリズム型の観光に転換していく。日本で初めて「エコツーリズム協会」を設立するなど、エコツーリズム運動を促進するとともに、自らも旅館経営者としてエコツーリズムを実践し、その普及に尽力。-4-



-5-

然にやさしいエコツーリズムを売りにして、かつ泊まつてもらうという発想で成功されたというカリスマの方です（自然）。

こういう方を100人、日本全国で顕彰します。「こういう人がいますよ」と紹介する取り組みによって、国としてあまり費用をかけずに情報が各地域に広がることを期待しているところです。

現に、我々はこういうカリスマの方に「カリスマ塾」を開いて頂き、例えは10人とか20人とか、実際にこの成功した方がおられる場所に来てもらって、現場で2泊3日ぐらい、講義を受けたり、実際に一緒にその経験をしたりして、各地域に持ち帰ってもらって次の発展につなげるというようなことをしています。

兵庫県近辺では、有馬温泉の「陶泉 御所坊」のご主人の金井さんは、有馬温泉の地域全体を巻き込んだ取り組みで成功された方ですし、神戸フィルムオフィス代表の田中まこさんという、映画を神戸に持ってきて、神戸が出るということで世界に名を売ろうというような取り組みでカリスマになった方もおられます。

こんな形で、政府としては成功した方々をご紹介することによって、いろいろな新しい流れへの対応を図っていこうと考えております。

2.5 主要国における出入国旅行者数国際ランキング（2002年）

今まで申し上げたのは、日本人の国内観光あるいは海外の観光についてですが、これからは外国人の誘致のお話です。

今、私ども政府が一番力を入れているのがこの外客誘致です。日本に来られる外国のお客様は、外に出る日本人の3分の1ぐらいで大変少ないのですが、今まで政府としても、外客誘致にあまり力を入れて参りませんでした。それが最近になって、日本の工場などがどんどん海外に移転してしまい、国内産業が

空洞化し、特に地方に行けば行くほどそういう状況が顕著になっています。昔ですと、首長さんなどは公共事業を持ってきたり、工場を誘致して、そこに定住人口が増えて雇用も増える、税金も入るということで地方を活性化しようとしてきましたが、国の財政も大変厳しく、工場が海外に移転するというような中で、誘致してもとても来てくれないというところで、要は地方に落ちるお金（パイ）を増やすために一番いいのが観光ではないかと考えるようになってきています。

日本人に来てもらうというのは、いろいろそのパイを食い合う面があるのですが、外国からのお客さんを呼ぶというのは、パイ自体が日本全体で増え、いいことではないかということで、いろいろな自治体の首長さんから、つまり地方から声が上がってきたということで、現に外国から旅行者が来ると、地域にはお金が落ちるし、その場で交流が行われることによって町が活性化するというようなこともあります、外客誘致には大変熱心になってきました。

我々中央政府としても予算がない中で、外国から純生でお客さんが来てお金を使ってもらえば大変効果があるということで、よし、それでは外客誘致を政府の政策として本格的に取り組もうではないかと、平成15年から始めたわけです。今はまだ3年目ですが、それなりに成果が出てきています。

現在、海外からの旅行者は、世界で33位、アジアの中でも8位ということで、出るほうは立派なのですが、入るほうは相当低く、お隣の韓国やアラブ首長国連邦などにも負けているような状態です。外客誘致は、このような状況の改善に加えて、私が冒頭申し上げました1.4兆円がもっともっと大きくなれば、それなりに経済効果も出てくるだろうということで取り組まれているわけです。

2.6 最近の政府における観光立国に向けた動き

取り組みの歴史のようなものがずっと書いてありますが、平成15年の小泉総理大臣の通常国会での施政方針演説の中に初めて、今500万人ぐらいの訪日外国人旅行者を2010年に1000万人にしようということが盛り込まれました。

これが発端で、それまでは運輸省の観光部でやっていましたが、これが一部局ということではなく、政府全体として取り組んでいこうということになりました。これを受けていろいろな取り組みがてきたのですが、その一つは「観光立国関係閣僚会議」です。観光というのは、「観光」という名前がついているのは私のポストだけなのですが、グリーンツーリズムは農林水産省などに関係があり、あるいは経産省も集客産業という形でやっていますし、厚生労働省も環境省も関係があります。いろいろな省にまたがって、結局は「観光」と言える仕事をしていますので、そういう閣僚が集まって協力していきましょうという意味で「閣僚会議」ができ、それから9月22日に「観光立国担当大臣」が任命されました。簡単に言うと、観光を担当する大臣というものが今までいなかつたのですが、きちんと名刺に「観光担当大臣」とつけて海外ともやり取りをします。

そういう中で、国の予算をつけて「ビジット・ジャパン・キャンペーン」という、外国からお客様に来てもらう宣伝活動をしたり、あるいは「観光立国推進戦略会議」というところで、今後の観光地整備に向けていろいろな提言を頂いたりというようなことでずっと進んできております。

2.7 観光立国に向けての取り組み

私どもが今、政府としてやろうとしている三つの大きな柱があり、それが「観光立国行動計画」の中にあるのですが、一つは、日本の観光地をよくしよ

最近の政府における観光立国に向けた動き

○平成15年（2003）

- 1月31日 小泉総理大臣の施政方針演説
 「2010年に訪日外国人旅行者を倍増の1千万人に」
 3月26日 第1回ビジット・ジャパン・キャンペーン実施本部会合開催
 4月24日 観光立国懇談会報告書取りまとめ(第4回観光立国懇談会)
 5月21日 第1回観光立国関係閣僚会議開催
 7月31日 観光立国行動計画の策定(第2回観光立国関係閣僚会議)
 9月22日 石原国土交通大臣を「観光立国担当大臣」に任命

○平成16年（2004）

- 1月19日 小泉総理大臣の施政方針演説
 「2010年に訪日外国人旅行者を倍増するため観光立国を積極的に推進」
 2月18日 観光政策に関する観光大臣・地域の大天使等との懇談会開催
 7月22日 女優の木村佳乃さんを「観光広報大使」に任命
 11月30日 観光立国推進戦略会議報告書取りまとめ(第5回観光立国推進戦略会議)
 12月末日 年間訪日外国人旅行者数 600万人達成（推計値）

○平成17年（2005）

- 1月 1日 「国土交通省観光立国推進本部」及び「外客誘致推進室」の設置
 1月 21日 小泉総理大臣の施政方針演説
 「ビジット・ジャパン・キャンペーンの強化や姉妹都市交流の拡大により、2010年
 までに外国人訪問者を1000万人にする目標の達成を図ります。」

-6-

観光立国に向けての取り組み

<目標>

- 訪日外国人観光客を「2010年までに1000万人に」（平成15年1月小泉総理施政方針演説）
 → ・観光立国行動計画を決定（平成15年7月 第2回観光立国関係閣僚会議）
 ・北側国土交通大臣を「観光立国担当大臣」に任命

観光立国行動計画の主要事項

I. 21世紀の進路「観光立国」の浸透

II. 日本の魅力・地域の魅力の確立

- ・「一地域一観光」
- ・良好な景観形成

III. 日本ブランドの海外への発信

- ・トップセールス
- ・ビジット・ジャパン・キャンペーン

IV. 観光立国に向けた環境整備

- ・外国人が一人歩きできる環境整備
- ・入国情緒の円滑化等
- ・旅行の低成本化

V. 観光立国に向けた戦略の推進

-7-

うということです。「日本の魅力・地域の魅力の確立」ということで、今までどちらかというと日本の観光地は、北海道の観光地だと、国内の観光地の中で競争していましたが、やはり世界の国際マーケットの中で、中国や韓国の観光地と競争していかなければなりません。そういう意味で、うまく見せるとか、あるいは一人歩きできるかということも含めて、観光地そのものを外国人の人にとって魅力あるものにしていかなければならぬ、そういう取り組みが一つです。

もう一つは、今まであまり日本を観光地としてアピールしてこなかったので、「日本にはこんないい観光地があるのですよ」と発信していかなければなりません。

3番目が、そういうことをやっても、例えば日本に着いた外国のお客さんが、日本人はすいすい入国審査を通るのに、こちらは1時間も待たされるとか、あるいはビザがなかなか下りないと、そういうことだと、せっかく日本に来ようという気持ちがあっても来なくなってしまいます。そういう制度的なバリアを取り払います。

この三つが大きな柱ということで、私どもは取り組んでいます。

2.8 ビジット・ジャパン・キャンペーン事業の主な取り組み

それについてご説明しますと、「ビジット・ジャパン・キャンペーン」はどんなことをしているかというと、先ほど申し上げたとおり、日本が観光地だとはあまり知られておらず、あまり宣伝していなかったわけで、日本の大使館などでも、外国に行って「日本に観光に来てください」などとは、今までほとんど言ってきて頂いておりません。

やはり東京などは、アメリカの方が見ると、「ビジネスで行く町で、観光で行くところではないだろう」とよくおっしゃられるのですが、実は東京にはい

ビジット・ジャパン・キャンペーン事業の主な取り組み

戦略的な日本ブランドの発信

重点市場として、韓国・中国・台湾・香港・アメリカ・イギリス・フランス・ドイツ。

**新聞・雑誌・テレビなどの
メディアを通じたPR**



香港の新聞に訪日ツアー広告と
共同広告掲載。

トップセールスの実施



小泉総理大臣が出演する
外国人旅行者訪日促進ビデオ放映

旅行会社との商談会の開催



JATA世界旅行博で各国から
関係者を招請、商談会開催

旅行博への出展



「韓国国際観光展（KOTFA2004）」
に出展（16年6月）

現地日本大使館との協力



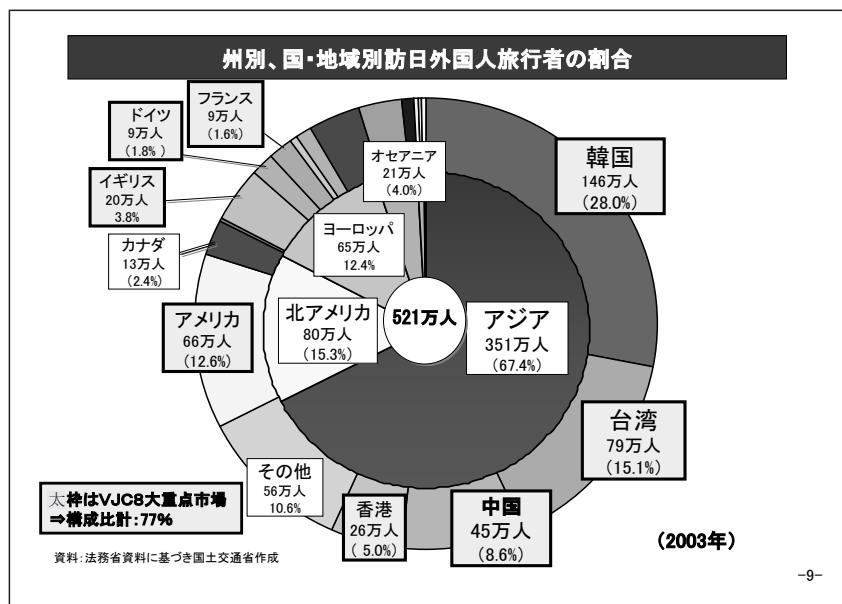
フランスVJC推進会（パリ）
(16年6月)

**国・地方自治体が
共同して行う事業**



「YOKOSO! JAPAN THE 祭り 東北」
(16年2月)

-8-



いろいろな下町やおいしい食べ物があって、観光地として見てもなかなかのものです。ここ神戸も多分そういうことなのだろうと思いますが、やはり「日本は観光地ですよ」と発信して、来てもらうということは国費でやるべきであるということで、予算をつけて頂いています。

具体的には、小泉総理にビデオに出てもらうとか、大使館も協力してくれていますが、一つは、ヨーロッパや中国やアメリカというのは、日本を観光地としてあまり見てくれていません。ですから、そういうところには、「日本の観光地はこんなところがあつていいところですよ」ということをうまくメディアなどを通じて発信していくを中心しています。

もう一つは、韓国や台湾、香港、そういう国には、すでに日本に来たことのある方がかなりおられるので、「日本は観光地ですよ」という発信をしてもあまり意味がなくて、例えば「スキーもできますよ」「ゴルフもできますよ」「温泉もありますよ」「北は北海道の亜寒帯から亜熱帯まで、こんなものがあります」という、要はリピーター獲得のために具体的な紹介をしていくほうがいいだろうと、このように2種類に分けて宣伝活動をしています。

そういうことで、着実に効果が出てきていると私どもは考えておりますが、今年は特にもうすぐ始まる「愛・地球博」がありますので、その愛知万博に来てみる気にさせるために、もちろん愛知万博も素晴らしいのですが、そのあとどこか回ってもらう、その前にどこか回ってもらったうえで行ってもらうというような、要は、いかに日本に来ようという気にさせるかという努力を、今年は勝負の年と我々は言っておりますが、頑張ってやっていきたいと考えています。

2.9 州別、国・地域別訪日外国人旅行者の割合

では日本にはどのようなお客様が来ているのかというのが前頁下のグラフ

です。

2003年は521万人来ておりますが、一番来ているのが韓国の方で、150万人ほどです。2番目が台湾で80万人、3番目がアメリカで66万人です。それから中国、香港となっています。私どもは「ビジット・ジャパン・キャンペーン」を均等にやっているわけではなく、やはり来てくれそうなところ、やはり韓国や台湾、アメリカ、中国を中心に売り込みをかけており、国名が太枠になっているところはいわゆる重点市場にしています。この市場には重点的に予算を使って宣伝し、来てもらうようにしていきたいと思っています。

500万人の外国人旅行客を2010年に1000万人にするというのは、実は言葉で書くのに比べると大変な作業で、どんなに努力してもヨーロッパからはそんなに期待できないものですから、やはり中国、韓国、台湾、香港のあたり、日本のお隣さんを中心に重点的なキャンペーンをしていこうと考えています。

2.10 観光立国推進戦略会議報告書のポイント

それから、観光地づくりについて、先ほど申し上げました「観光立国推進戦略会議」から報告書を頂いており、これは役所のみならず、産業界、旅行業界、ホテル・旅館業界など、民間の知恵もお借りしようということで、牛尾治朗さんが座長ですが、民間有識者の方々に提言を頂いたものです。

<課題1：国際競争力のある面的観光地づくり>

簡単にご説明しますと、一つは、観光地を通り過ぎてしまう、これをどうしたら通り過ぎないようにするかということを提言頂いているわけです。「『点から線、線から面』への広がりのある『観光』、要はもう1泊してもらうような面白みをそれぞれの観光地で作ればいいのだということで、単にお寺巡りだけだとそのまま行ってしまうのですが、例えば釣り、そば打ち、ゴルフなどをし

たり、陶器を作る経験をしたりすると、どうしても何時間か必要なわけですから、そうするとそこの地域にとどまつてもらえる、消費をしてもらえるということで、例えば自分の町だけではなく、周辺と連携して、トータルでコンテンツを作る。そのことによってもう1泊分増えるとか、そのような取り組みをしていったらいいですよと、こういうことを言って頂いています。

＜課題2：国際競争力強化のためのソフトインフラ＞

これはむしろ産業界の皆様への提言ですが、今、実は観光業界は大変古い体质だと言われています。どんなに営業努力をしているところでも、努力していくなくて怠けているところでも、週末や連休や夏休みになるとどつとお客様が来る。それ以外の時期は、一生懸命努力しても努力しなくとも、来ないところは来ない。結局土日でみんな生きているということになって、努力した人もしない人もそれなりに生きていける世の中なのです。だから競争がないのです。

そこで、競争を作らなければいけない。競争を作るためにはどうしたらいいかという一つの例が「泊食分離」、泊まるところと食べるところを別々にすることです。例えば温泉地なら温泉地でそういう取り組みをしてみると、ここには泊まるけれども、食べ物はここの宿屋の食堂で食べるとか、あるいは泊まるところもこういうモダンなほうがいい、あるいはちょっと高いけれども非常にいい雰囲気だとか、商品に差別化が生じてきて、ラーメンで売るところや、和食で売るところ、洋食で売るところと、たくさん出てきて、そういう中で競争が始まるのではないかというような前提で、その「泊食分離」などを地域全体で取り組んでみたらどうかという提言も頂いています。あとは、人材育成が重要だということも言われています。

＜課題3：外国人旅行者の訪日促進＞

これはどちらかというと我々官への提言で、観光ビザをなくすようにしたら

観光立国推進戦略会議報告書のポイント ①

地域主導の国際競争力のある観光地づくり・新しい観光への取り組みを全国へ
「住んでよし、訪れてよしの国づくり」
観光立国推進に向けての4つの課題と、国、自治体、産業界などに対する55の提言

課題1：国際競争力のある面的観光地づくり

これからの「観光」は、「点から點、線から面」へ広がりのある「観光」であり、
○地理的には、宿から街へ、街から「地域」へと観光の対象が拡大し、
○時間的には、通過・日帰りから泊2日、1泊2日から連泊、リピータ化・週末住民化・定住へと潜在が長期化し、
○「地域」経済が潤うもの。

①釣り、そり打ち、スポーツ、歴史・文化探訪等時間消費型・体験型の観光コンテンツの充実 【提言2～3】
②世界遺産はもとより、近代の街並み、産業遺産、茅葺き屋根等の新たな観光資源の発掘と確実、活用 【提言4～6】
③農山村の景観、伝統的な街並み等美しい景観の整備
④地域固有の料理や土産など地域ブランドの振興 【提言7～10】
⑤農業、漁業、伝統産業、商業・サービス業など観光地内の幅広い産業間パートナーシップの確立とテーマを同じにする観光地同士のネットワーク化 【提言15】

など面的に広がりのある観光地づくりが必要。

課題2：国際競争力強化のためのソフトインフラ

これからの「旅」は、
○団体旅行仕様(画一化した旅行)から個人・家族仕様(多様かつ個性的な旅行)へ
○「金銭消費型」から「時間消費型(体験)、「交流」などを楽しむ長期滞在型】へ変化。

①「旅」の担い手である観光関連産業の近代化・合理化の促進 【提言16～22】
・観光客の行動変遷の自由度増加による競争の促進
・「泊食分離」、「料理選択制」、「交流分離」、「ITの活用」
・観光地の独自の条件を活かした魅力的な施設の整備促進
・規制の適用改善・特区制度の活用
・各産業、地域の効果的な観光戦略の策定のための「観光統計の体系的な整備」
②観光関連産業を担う人材の育成強化 【提言23～30】
・「大学等の観光関連学部・学科等の設置の促進」
・「観光カリスマ塾の活用」、「地域限定通訳ガイド」

が必要。

-10-

観光立国推進戦略会議報告書のポイント ②

課題3：外国人旅行者の訪日促進

2010年までに日本に訪れる外国人旅行者を1,000万人に倍増するためには、官民での目標達成にいたるロードマップの策定が必要。

①国際手続きの簡素化・円滑化 【提言31～35】
○ビザ取扱の負担軽減の検討
・中国の団体観光旅行の差給対象地域の拡大
・韓国、台湾の短期ビザの免除
○入国審査の時間短縮
・入国審査官の機動的配置
・ブリリアンス(出発地での審査)とセカンダリ審査の導入
②地域の外国人旅行者受け入れ体制の整備 【提言36～41】
・宿泊施設・観光施設・公共交通機関等における外語翻訳記・英文案内の導入
・翻訳機能を活用した携帯電話や街頭や店舗に埋め込まれたICタグによるハイテクを駆使した観光案内の導入
③外国人への戦略的情報発信 【提言42～46】
・明確な目標設定に基づく日本の魅力の情報発信や旅行商品の開発の計画的実施
・ビジネス・ジャパン・キャンペーンの重点地域の見直しと宣伝方法の高度化
・韓国・中国等との連携による東アジア観光圏への誘客

課題4：国民観光の促進

これから「観光」と「旅」の実現には、旅行需要の平準化が必要。
・旅行時期集中の弊害
└宿泊業サイド: サービス内容に関する競争の阻害
└観光客サイド: 高い料金と低いサービスレベル

①国民の休暇取得促進・分化化 【提言47～51】
○大人の休暇費
・年次有給休暇の計画的付与制度の導入・促進
・地域ごとに異なる休日の設定
○子供の休暇費
・学校の秋休み、2学期制、家庭のための休暇など学業休業の多様化・柔軟化
②旅行コストの引き下げ 【提言52～54】
○雨散期・オフピーク時間の有効活用
・運賃・料金の割引制度の多様化
③国民への戦略的情報の発信 【提言55】
○観光への意識の高揚
・観光の文化性
・観光の経済効果

【提言】

国は、これから「観光」と「旅」の実現のため、国際競争力のある面的観光地づくりに意欲を示す地域のプランニングに対し支援を行うとともに、採択したプロジェクトについては、政策群メニュー等を活用して、政府一体となって支援。

-11-

いいではないかとか、入国審査官を増やして外国人の人をスムーズに通るようにしてもらうというようなことをいろいろご提言頂いています。これは私どもの省だけではなく、法務省や外務省、税関などと一緒に取り組んでいきたいと思っております。

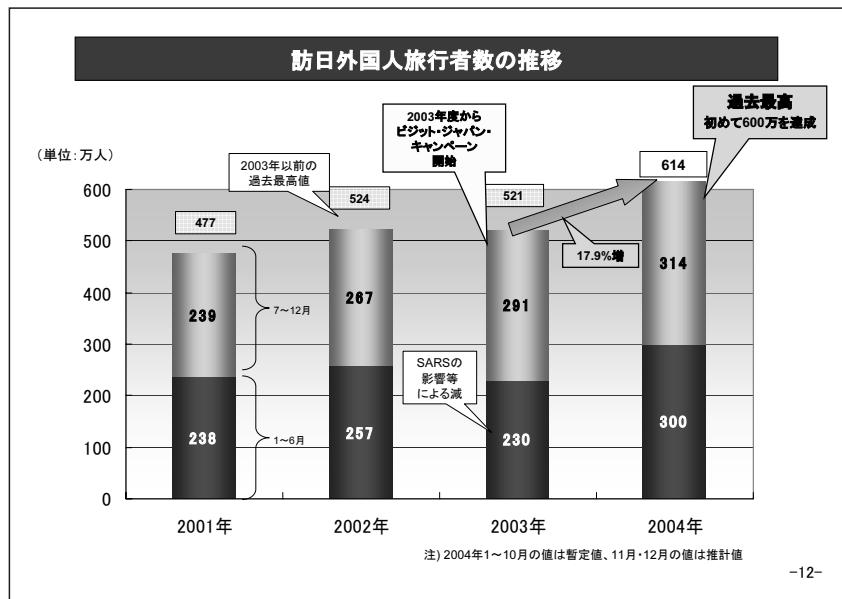
＜課題4：国民観光の促進＞

先ほどの、週末にお客さんが集中するということと関連するのですが、やはり日本の休暇制度がなっていないのではないかと言われています。結局、自分の都合で職場を離れられないから、どうしてもみんなが休む休暇のときにしか旅に出ない。学校の休みも同じで、家族の都合で授業を抜けて旅に出るということがあまり奨励されていないくて、やはり夏休みなど、要はみんな同じときにしか休まない。やはりここを変えないと、観光産業の古い業界体質も変わってこないだろうし、何とかしてメスを入れなければいけないと言われています。

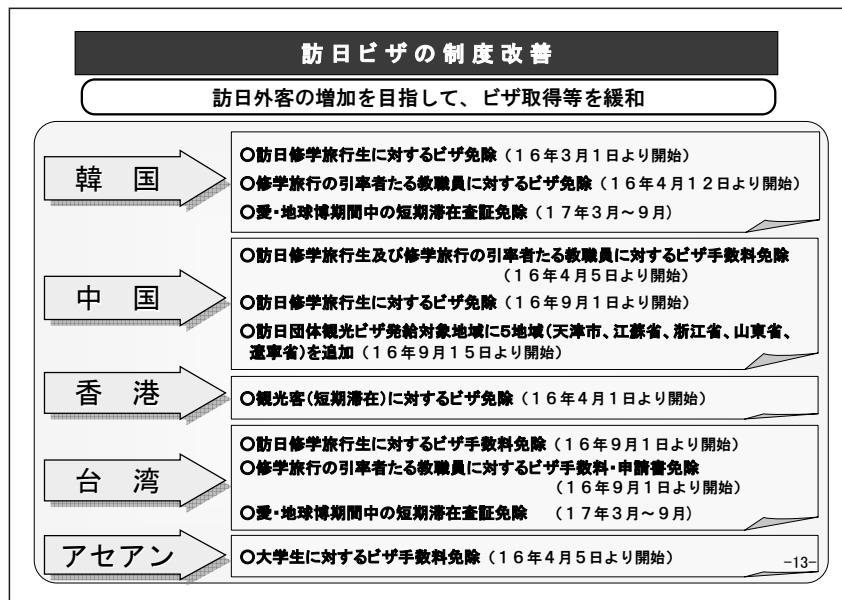
いろいろ大変いい提言を頂いていますが、すぐできることと、すぐにはできないことがあり、今の休暇制度の話などは大変難しい、社会全体、生き方にもかかわるような話ですので、どこまですぐできるかということはあるのですが、少なくともそういう視点を持って我々は取り組んでいきたいと考えています。

2.11 訪日外国人旅行者数の推移

こうして2003年から取り組んできた「ビジット・ジャパン・キャンペーン」の効果を示すのが、右上のグラフです。一昨年が521万人でしたが、昨年は614万人で、過去初めて600万人の大台を超えております。SARSの影響がなくなつたということもあるでしょうが、やはり日本は観光地としていいところですよという「ビジット・ジャパン・キャンペーん」の成果が出てきているのではないかと考えています、いろいろ分析をしていますが、もっともっと増やして



-12-



いくための努力をしていくべきだと思います。

今年は愛知万博がもうすぐオープンし、半年間開催します。やはり国際博覧会には、外国人の人も大変関心を持っておられるので、ぜひその愛知万博に来てもらって、そのついでに日本のいろいろな観光地を回ってもらえるように、私どもは国の予算を使ってキャンペーンをしていますが、旅行業界、あるいはホテル・交通機関の皆様ともタイアップしながら、できるだけ愛知万博にたくさん来てもらい、そのお客様が津々浦々に訪れてもらえるように、具体的な取り組みをしているところです。今年は100万人増やそうと、大変な数字ですが、できるだけ実現できるように努力していきたいと思っています。

2.12 ニセコ・小樽地域における観光地づくり事例

最後に一つだけ、ちょっと宣伝させて頂きますと、来年度から私どもは観光地づくりを予算で支援させて頂くことにしています。

ここにはニセコの例を挙げているのですが、昔、ニセコ町の係長さんで大変優秀な方がおられたそうです。これが今の町長さんなのですが、その方が、行政だけが観光地づくりをしていてもだめだということで、ニセコ町が50%株を持ち、ニセコの町民が残りの50%の株を持つような形で、それまで「観光協会」だったのが株式会社化をして、行政と民間が一緒に取り組んで、ニセコを単にスキーだけの観光地ではなく、通年型の観光地にしようということで、積極的に取り組まれたのだそうです。そこにオーストラリアの方が入ってきて、夏はラフティング、冬はスキーということで、オーストラリアの人にも大変な人気になり、非常にいい観光地として成功したという物語があります。

このように、いろいろ地方での取り組みはやはり行政が考えるだけではなく、その地域の民間の皆様と一緒にやらなければいけないということだと思います。

ビジット・ジャパン・キャンペーンの高度化

(初年度)
平成15年度 20億円
平成16年度 32億円
平成17年度 35億円
(政府予算案)

戦略的な日本ブランドの発信

ビジット・ジャパン・キャンペーンの高度化

事業を客観評価し、効果の高い事業へ集中化・重点化

潜在的訪日外客数が多い見込まれるオーストラリア、カナダ、シンガポール、タイを重点市場に追加

重点市場以外の各国における訪日促進のため在外公館と連携

香港の新聞に訪日ツアーアドと共同広告掲載

韓国国際観光展への出展

（国際交流を加速させる動き）
・2004年9月より中国訪日団体観光ビザの発給対象地域の拡大
(2都市1省 1.1億人→4都市5省3.7億人)
・「愛・地球博」開催期間中訪日韓国人観光客のビザ免除
(2005年3月～9月)

海外の旅行会社に対する魅力的な訪日旅行商品の造成支援

海外メディアを活用したCM戦略等効果的な広報宣伝活動

日韓共同訪問年広報大使木村佳乃さんとチエ・ジウさん

小泉総理大臣が出演する外国人旅行者訪日促進ビデオ放映

-14-

ニセコ・小樽地域における観光地づくり事例

・冬だけの観光地から通年型の観光に転換

羊蹄山 小樽運河

・現地で旅行業や不動産業を営む外国人経営者たちによる活動

ロス・フィンドレー（観光カリスマ）の活動によりラフティング人口が増加

様々な分野で活躍する外国人経営者たちが定期会議を開き、外国人観光客の啓発等を実施

・株式会社ニセコリゾート観光協会の設立

・逢坂ニセコ町長による住民参加型観光振興
・ニセコ町(50%)とニセコ町民(50%)の出資により観光協会を株式会社化

-15-

2.13 観光ルネサンス事業の創設（納3億円：新規）

そこで、来年度は、「観光地域づくりの主体」として民間団体や地方自治体が一体となって自分の町をこういう観光地にするという計画を立てられたときに、それに対して補助金を出すという「観光ルネサンス事業」を創設することにしています。

どんなことをするかというと、インターネットによるその町の情報発信や、人材育成、外国語の研修、あるいは地域ブランドを作るためにお金がかかるとか、そもそも経費に対して国が4割の補助をします。そういうことによって、今まで何となく求心力がなくてばらばらだった人たちが集まって、一つの方向に動きだすきっかけになるのではないかと、こういう制度を作らせて頂きました。

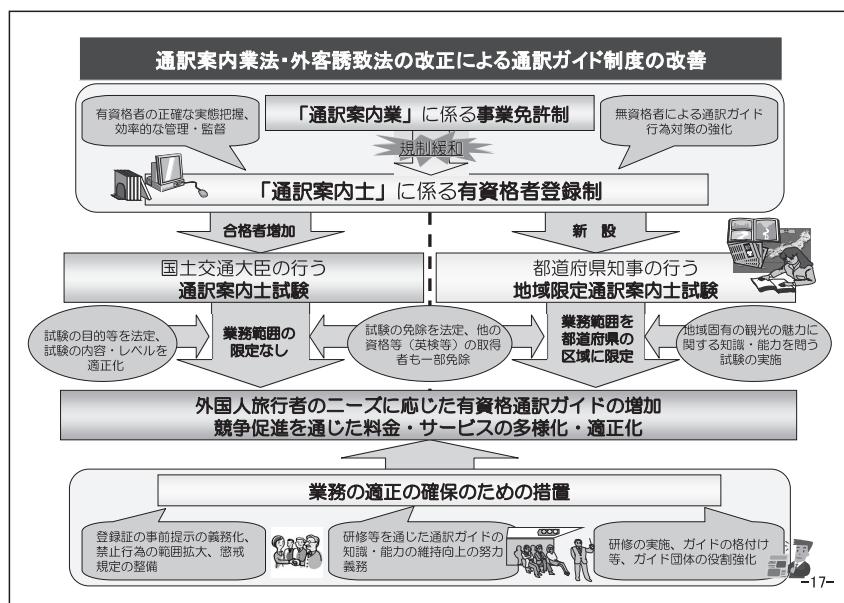
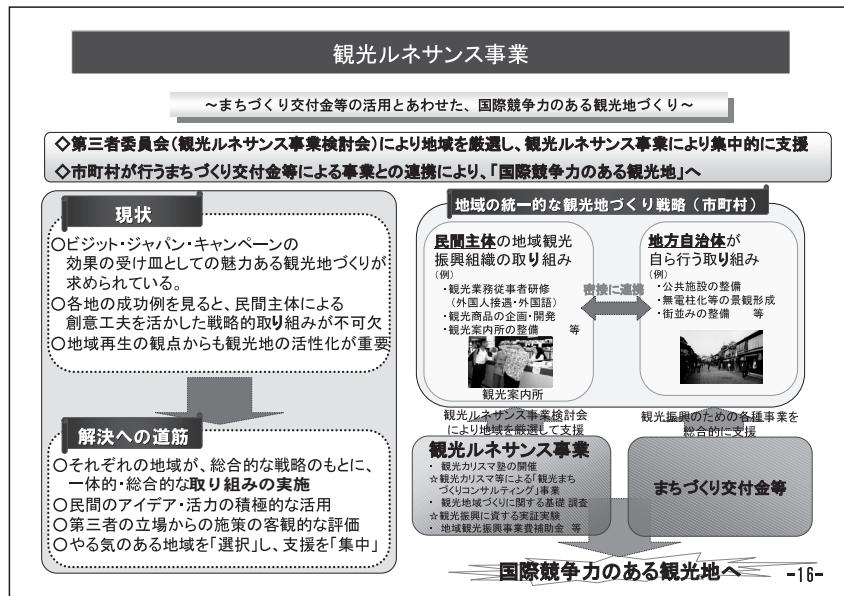
これによって、10個そういう取り組みがなされて、一つでも二つでも成功すれば、我々としては大変意義のある制度を作ったなと喜ばれるのではないかと、今、日本全国の自治体、あるいは民間の皆様に、「われこそは」というようなアイデア・計画があつたら手を挙げてくださいと募集している最中ですので、皆様の中にもそういう観光によるまちづくりにご関心のある向きがおられましたら、私どもにアプローチして頂ければ、もう少し細かくご説明申し上げたいと思います。

ざっぱくになりましたが、私どもの国の政策の概要をご紹介させて頂きました。どうもありがとうございました（拍手）。

（司会） どうもありがとうございました。

第Ⅰ部では、兵庫県知事の井戸敏三様、そして今お話を頂きました国土交通省大臣官房総合観光政策審議官、鷺頭誠様に基調講演を頂戴いたしました。

少し皆様のお話もお伺いしたかったのですが、大変ご熱心にお話を頂きました



ので、ここで少しお休みを取らないと、今度Ⅱ部に入るまでの間、お手洗いにも行けない状態になってまいります。このあとⅡ部のパネルディスカッションは、15時から開催してまいります。それまでに一度お外に出られた方はお戻り頂きたいと思います。万一遅れて入られる場合は、皆様の後ろの、今開いたり閉まつたりしております明るいドアのほうからお入り頂きたいと思います。前方にお飲み物などもご用意しておりますので、どうぞこちらもご自由にお飲みください。それでは、15時まで休憩です。

— 休憩 —

第3章 ツーリズムにおける地域連携の課題

パネリスト	江木 耕一
	小林 英俊
	寺本 光雄
	奥村 弘
	西村 肇
コーディネーター	小西 康生

(司会) ただいまよりパネルディスカッションを始めます。先ほどのお二人の基調講演を踏まえまして、具体的な取り組みを行っておられるパネリストの方々に、これらについてご意見を頂戴したいと存じます。

それでは、皆様から向かって左側から順に、パネリストの皆様をご紹介します。まず、兵庫県産業労働部長の江木耕一様。神戸大学文学部助教授、奥村弘。兵庫県城崎町長で株式会社西村屋代表取締役社長、西村肇様。太成学院大学教授の寺本光雄様。そして、財団法人日本交通公社理事・観光マーケティング部長、小林英俊様です。そして、コーディネーターは神戸大学経済経営研究所教授、小西康生がいたします。

それでは、お願いします。

(小西) それでは、早速始めましょう。先ほどお二人に基調講演をして頂きました。基調講演のときも40分ぐらいで終わるとおっしゃったので、時間が余るのでないか、お二人ぐらい質問ができるかと思っていたのですが、お二人とも熱心にお話をされたので、時間がありませんでした。知事のお話に対する

質問は江木部長がしてくださると聞いていますので、それは後でしてください。

ではとりあえず、今のタイトルしかご紹介ていませんので、最初に基調講演についての感想と、今ツーリズムに関連してどういうことをしていらっしゃるかということについて、自己紹介を兼ねてお話を一巡したいと思います。では、江木部長からお願ひします。

(江木) 県の産業労働部長をしています。今、経済雇用が非常に厳しいので、観光あるいはツーリズムというより、この兵庫の経済をどう活性化していくのか、雇用をどう確保していくのかという仕事をしています。日々は観光ツーリズムとあまり関係のない仕事をしていますが、観光とのかかわりは1984～86年の3年間、当時県の中にあった商工部新観光課というところで観光振興係長をさせて頂きました。当時、1985年がプラザ合意の年で、その辺りから日本の経済が少しおかしくなるということで、これから内需主導型の経済構造を構築していく中で、ソフト産業や観光産業など、リゾート法などもその前後ではなかったかと思いますが、そういうソフトの取り組みが注目をされつつありました。

それまでは輸出振興やものづくり産業べったりで、産業の面でもいわば20世紀型の工業社会を代表するようなものだったので、観光は行政の中で抜きにすることはできないといって、課はあるけれども、予算は非常に少ない状況でした。端的に言うと、私は観光の係長なので、観光の予算を要求するわけですが、最後なかなか予算がつきません。けんか腰で財政課に言いに行くと、「観光なんてもともと行政がやる仕事じゃないんだよ」と、なかなか予算がつきませんでした。行政でやる仕事ではないのに、私の観光振興係長という役割は何なのかというところがありました。なかなか理解が得られませんでした。

大きな転機を迎えたのは、先ほど言ったように1985年、内需型産業ということになりましたが、基本的にはトップの姿勢もあって、震災復興という絡みで、

堺屋太一さんが「知価社会」という言葉を使われていますが、これから集客産業が非常に重要になってくるのではないかと、2001年ミレニアムを記念して、通常の観光だけではなくて、産業から文化、スポーツすべてを含めて、阪神・淡路の復興ぶりを示すようなイベントをしてはどうかということで、「See阪神・淡路キャンペーン」を開催しました。その辺りからツーリズムという概念が県政の中にも入ってきたと思います。

現在の取り組みについては、今、井戸知事から、従来型の観光だけではなくて、芸術・文化など幅広い取り組みの紹介をさせて頂きましたが、観光からツーリズムへ、といった方向に展開しつつあります。

最後に、これはオフレコかもしれません、今年7月3日に知事の2期目の選挙があります。それまでは候補者として選挙運動をしますが、恐らく今日知事がいろいろ話をしているうちに、自分の意識が盛り上がって、神戸市さんが観光監というものを置かれていますが、一つのセクションだけで観光やツーリズムはできないので、府内横断的にマネジメントするような観光監のようなものを置くということを選挙公約にしようかなと言って、帰りました。兵庫県ツーリズムから井戸イズムという形で、多分もっともっと力を入れていくことになると思いますが、よろしくお願いをして、自己紹介に代えさせて頂きたいと思います（拍手）。

（小西） どうもありがとうございました。

続いて奥村先生、お願いします。

（奥村） 文学部の奥村です。私の専門は日本近代の地域の歴史で、江戸時代終わりから明治ぐらいまでです。西は赤穂市から、東は猪名川町まで、神戸市や姫路市など、県内のいろいろな自治体史の編纂に携わってきました。その中で地域の歴史の遺産という問題について考えさせられることが多くて、その活

用の一つとしてやはりツーリズムの問題は大事だと考えています。

また、ツーリズムというものを考えるときに、住む場所への住民の関心が高まっていることも重要です。先ほど、まちづくりへの取り組みや、そういうものを資源として地域を再発見することが非常に大事になってきているのだという話がありましたが、私自身もそれは非常に感じるところです。これはどこの自治体もそうですが、自分が住む地域への関心は高まっているように思います。

先ほど理事から、新しい神戸大学の地域連携の、文部科学省「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」の中で「地域歴史遺産の活用を図る地域リーダー養成」という話がありましたが、地域の歴史遺産ということが最近よく言われるようになりました。これは姫路城や熊野などの世界遺産という考え方と、ある意味では対極をなす歴史遺産についての言葉です。国宝や重要文化財とは少し違った形で使われるようになりました。それは、地域の人たちが自分たちの町や村の歴史で、これは次の世代に伝えなければならないと思ったものが地域遺産であるという考え方です。

阪神・淡路大震災記念「人と防災未来センター」に行くと、震災のときにボランティアや地域の人たちが残したちらしやビラなどが16万点ぐらい収められていますが、それが収蔵されている文書箱の一部が今、展示ホールに展示されています。震災時に生まれたビラや模造紙書きの伝言板などは、それとしては文化財という考え方からすれば、別に珍しいものではないでしょうが、震災という大事な出来事を伝えていくということで重要視されています。芸術的な価値とは別に、社会的に価値を持つようになってくる、このようなものを地域遺産と呼んでおり、そういうものの保存や活用をする活動に私たち自身も参加しています。

2004年の秋の台風23号の水害で但馬や淡路を中心にそういうものが相当失われました。歴史資料ネットワークというボランティア団体と一緒にになって、神戸大学としてもその保全活動を文学部地域連携センターが中心となって行って

いるところです。

地域遺産について、今日のシンポジウムとの関係を考えてみるならば、そのような地域の歴史遺産、ある意味では自分の地域のことを深く知るということとツーリズムとは深く関係しています。先ほどの知事の話にもありましたが、自分の地域を深く知るということは同時に、ほかの地域のことも深く知ろうということにつながってきます。自分の地域を深く知らないと、ほかの地域を訪れても深く知ろうとする感性は生まれないということさえ言えるように思います。自分の地域を深く知ることが大前提になって、もう一度、ほかの地域も深く知る。そのような在り方を今後どのように社会の中で作り上げていったらしいのかということをツーリズムと関係させながら考えています。そのような理解を進めることができリーダーをどうしたら養成できるかということが今課題として、地域で連携しています。その具体的なありさまなどはあとで触れますので、私の自己紹介としては以上でございます（拍手）。

（小西） どうもありがとうございました。

続きまして、西村社長、お願いします。

（西村） 西村です。2年8か月前から町長をさせて頂いていますが、あと10日ほどで無事に失職します。その日を楽しみにしています。

今度1市5町が大変大きな町に生まれ変わって新豊岡市となります。現在の豊岡市が中心になって、豊岡、城崎、出石、但東、日高、竹野、700km²というと、淡路島より一回り大きく、シンガポールよりも大きい人口わずか9万人ぐらいの市です。合併を迎える中で、町が輝かないと、我が商売も輝かないといった思いで、初めての経験でしたが、行政に参画し、まちづくり、城崎ブランドの再構築といったものを目指して一生懸命やってきました。

10年近く前に神戸の流通科学大学の学生さんにお話をしたのですが、そのと

きに国内観光のライバルを三つ挙げたのを思い出しました。一つは海外旅行、一つはアウトドア、もう一つは携帯電話です。当時、携帯電話が出たところで、これは限られた家計の中で非常に大きなライバルになるなという思いで見ていました。それ以外にもいろいろありますが、竹下内閣のときにふるさと創生の1億の基金をばらまきましたが、あれで自治体が一番たくさんやったのは、温泉を掘るということです。加えて、最近はスーパー銭湯があちこちにできました。わざわざ温泉まで行かなくても、自分の身の回りでお風呂に入れます。

このようなことがレジャー支出を抑えているのではないかと思います。その辺のところは先生方のいろいろな洞察にお任せするとして、平成3年が国内観光のピークで、それから見ると、今は約70%泊数が落ちています。それに加えて、宿泊単価が当時の約70%になっています。平成3年頃から比べると国内観光の消費の在り方は、ホテルも旅館もオーバーストアになっているのです。観光、観光といろいろ夢のようなお話が出ていますが、現場は非常に大変な状況に追いやられています。こうした中で、まちづくりと、宿泊産業、観光をどうやって盛り立てていくか、大変厳しい時代を迎えてます。

もう一つの問題はマンパワーです。お客様をお迎えするある程度のレベルの方をどうやって確保していくか、いわゆる従業員の確保がこれからはなかなか大変になっていきます。高齢化・少子化の中で、最終的には人間を輸入する。具体的に言うと、大変大きな人口の中国といったところからサービスをして頂く方を輸入してトレーニングしていく。フィリピンの方を看護関係に導入しようという動きがありますが、そういうことをしていかないと、国内の観光産業はなかなか守れない時代になってきたという思いでおります。

4月から私は本業の旅館の主人に戻りますが、3年近く現場を離れていたので、もう一度一から勉強しながら、今度は自分の商売のほうであとしばらく頑張ってみようと思っています。どうぞよろしくお願いします（拍手）。

(小西) ありがとうございました。

それでは、寺本先生、お願ひします。

(寺本) 寺本です。専門は決して観光ではありません。ただ、ツーリズムの多様性に最近特に関心を持っています。神戸大学経済経営研究所の中に、ツーリズム研究部会を小西先生と一緒に立ち上げました。それから5年ばかりツーリズムについて勉強しています。私の専門は、地域政策と言っていますが、地域計画やまちづくりです。まちづくりというのはご存知のとおり、今まででは空間計画というか、あるいは基盤整備というような非常にフィジカルな計画を中心でした。

ところが、最近10年ぐらいは、まちづくりというのは、その地域に住んでおられる方を中心とした人づくり（交流づくり）であるのではないだろうか。その地域の人々がその地域を再発見して、愛着と誇りを持てるような地域にしていくことがまちづくりの基本であるということを、いろいろなところで言われています。それをずっと突き進めていくと、まちづくりはだんだん観光に広がってきます。なぜかというと、自分の住む、あるいは活動する地域に愛着と誇りを持つとうと思えば、いろいろなところからの来訪者によく見て頂きたい。そのために自分が地域を勉強しなければならない。そして、私の住んでいるところはなんと素晴らしいかを発見する。あるいは、間違ったところがあれば、来訪者の意見を聞いて改正していく。地域住民の非常に謙虚な気持ちと、先ほども出ていたホスピタリティがあって、初めてまちづくりができるのだとだんだん分かってきました。そういう意味で、まちづくりは「観光まちづくり」というような流れにつながってきます。

そうなると、今日の知事の話ではないですが、観光からツーリズムへ、「人々の交流やまちづくりを重視する」というのがツーリズムの一番大事なところだというお話があって、非常に意を強くしたわけです。あとでもう少しツーリズ

ムについてお話をしたいと思います。そういう意味では、知事の話もやはりツーリズムはまちづくりにつながるのだということを言われていると思います。

それから、国土交通省（国）は観光立国ということで、外国人訪問者を1000万人にしようという大きな目標があるのです。今まで観光は我が国では運輸省が担当して、観光がなぜツーリズムにならないかということはいろいろなところで言われていて、「観光」という名前を使っていいる限りは決して広がりはないだろうと思っていました。それが、国土交通省になったからだと思うのですが、「観光ルネサンス事業」の創設です。それは観光地域づくりという3億円ぐらいの新規の補助金事業かもしれません、まちづくり交付金による支援をするものです。国土交通省になればこそ、こういうことができるのではないかでしょうか。そうなると、観光がツーリズムに変われば、日本の国自体も大きく見方が変わってくるでしょう。ましてや地域、あるいは地方自治体が今まで力を入れてきたまちづくりが観光というものを取り込んで、より一層発展できるのではないかと、今日の基調講演を聞いて意を強くしました。

簡単な自己紹介と、お二人の基調講演の話の感想に代えさせて頂きます。どうもありがとうございました（拍手）。

（小西） どうもありがとうございました。

最後になりましたが、小林理事にお願いします。

（小林） 私だけ東京から来たと思われているので、まず自己紹介をします。兵庫県加古川出身です。高校は加古川東高なのですが、同級生がたくさん神戸大学に入っています。最初に話を聞いたときに、神戸大学でやるというので神大とはどんなところか興味があり、やって参りました。

旅行との関わりですが、大学では農学部にいまして、「人間にとて自然とは何か」「なぜ人間は自然を見るために旅行に出かけるのか」ということを研

究しました。2年や3年でなかなか研究が終わらないので、このまま研究をしながらお金がもらえるところはどこだろうと思って、旅行業を選んだのですが、そのころ交通公社では、文学部系で語学や歴史、地理をやっている人間は要るけれども、なぜ農学部の人間が旅行業に来るのだと、門前払いを食らいました。これは面白くないから、なぜ要らないのか、と説明を求めて押しかけていったところ、そこまで言うなら試験を受けてみろということになって、旅行業に入ったようなわけです。

入社後は、海外旅行の企画と営業を中心にやっていたのですが、「人間がなぜ旅行をするのか」ということをずっと考え続けていました。今の研究機関に移ったのが5年前です。その後、せっかく農学部を出ているので、まちづくりと観光、あるいは一番の専門にしている、環境と観光をどう考えるか、最近ではエコツーリズムとか、サスティナブル・ツーリズムなどと呼んでいますが、それからもう少し広く考えて、これも環境と関係があるのですが、健康と観光はどうかかわるか、このようなことを主に研究しています。

先ほど、知事のお話が非常に面白かったということと、もう一つは、知事がああいうパワー・ポイントを使って観光の説明をされると、私の出番がなくなるのでちょっと困ったなと思いました。冗談はさておき、最近、観光のことを語る知事さんがすごく増えています。実は今週も違う県の知事と対談していたのですが、観光を非常に重視しています。それは各先生がおっしゃったように、地域づくりの中に観光を取り込むという考え方が浸透してきたこと、もう一つは、各産業が観光と結びつくことによって活性化する、例えば1次産業、2次産業、あるいは3次産業が、観光的視点からの発想によって変えられるのではないかということで、非常に注目されています。

このような考え方から、各県で観光にかかわっている組織を変えようという動きが出ています。先ほどは横断的に考える観光監を造ろうかという話が出ましたが、専任担当を置くということではなくて、組織を変えてしまおうという動

きが結構出ています。例えば、山梨県では今まで観光誘致を主に行う観光課だけだったのですが、それと農林業などの1次産業の担当官と自然環境保護にかかわっている部署と一緒にして観光部というものを作りました。非常に大きな組織で、部長、次長、3課長がいます。このように観光をもっと大きな括りの中で見直そうということです。

あるいは、大分県では、観光とまちづくりのセクションを一緒にしてもっと大きな組織にしようとか、三重県でも今度組織を変えますが、観光はプロモーションではなく、先ほどから話が出ているように、地域づくりであったり、あるいは住民に誇りを持たせるなど、いろいろな意味があるのですが、今までとは違う視点からも観光を考えましょうという動きになっています。

最後にツーリズムの多様化に関係して私どもの仕事のご紹介をします。私どもの仕事というのは観光にかかわるいろいろなコンサルをしていますが、5年前はほとんど旧運輸省の仕事だけだったのですが、今は例えば、河川を観光的視点から見たらどうなるかというような旧建設省絡みの仕事があります。それから、総務省からは当然過疎対策もあるのですが、新しい住み方として都市と農村と両方住めるようなマルチハビテーションといった都市と農村の新しい交流などです。農林省からも同様の仕事が来ています。例えば最近では、私もこの委員をしているのですが、森林を歩くことによって人間の心身にどういう影響があるかを医学的に調べ、それを森林セラピーとして広めたいとか、あるいは外務省系ではODAの在り方をハードから観光を含むソフト支援に変えようということで、JICA絡みの仕事が増えています。それから文科省の中では文化庁が、文化資源・文化財を観光とどう両立させられるか。もちろん環境省はエコツーリズムですが、本当に各省から観光にかかわる仕事が来ています。今日のテーマは「多様なツーリズムの可能性を探る」ということですが、すでにツーリズムは多様化しています。あとでまた時間があればお話をしたいと思います。

それから、今日のもう一つのテーマは「観光からツーリズムへ」なので、各先生がいろいろお話になっていますが、私は、ツーリズムというのは社会のシステムだと思っています。ですから、例えば教育あるいは休暇制度など、いろいろなことを含めてツーリズムだと思っています。そういう社会的な構造が変わらないと世の中は変わらないかと思うので、ツーリズムという捉え方をして頂けるのは、非常にありがたいし（というか）、変わるべき可能性が高くなると思います。観光、観光と言っている間は変わらないだろうと思います。そういう意味で、今日のフォーラムは非常に意味があるのではないかと思います。あとでまた続けてお話をします（拍手）。

（小西） どうもありがとうございました。

これで一巡しました。あとは、パネリストの皆さんについての追加的な情報を持っていきますので、それらにも関連してお話をして頂こうと思います。

今度は逆に行きましょうか。小林理事にお伺いしましょう。鷺頭さんが、例えば観光立国懇談会の報告書や、観光行動計画、観光立国推進戦略会議の報告書をご説明されました。ここでは、やはり全部まだまだ「観光」という言葉です。「ツーリズム」というところまで行っていません。その報告書自体はかなりの量ですが、ホームページから全部読めます。読むに当たって、こんなところに気をつけて読んだほうがいいよというあたりをアドバイス頂けますか。それと併せて、多彩なツーリズムというものも紹介してください。

（小林） いきなり大変難しい質問で、大学教授というのはだから嫌いなんだと思っているのですが（笑）。冗談は抜きにして、お手元にある「観光立国推進戦略会議報告書」は非常によくできています。本当に全くそのとおりだと思います。

しかし、先ほどからお話が出ているように、今ある枠組みの中で観光を考え

ている限りは、多分ここに書かれているような方法論、戦術論の域からは出ないのだろうと思います。どういうことかというと、ここで言う観光は、要するに、経済が発展して懐が豊かになってお金が余ったら、その次にやるものだという位置づけなのです。常にまず経済があって、文化があるのだという枠組みから出ていないのです。そうではなくて、逆に文化産業や文化が世の中や経済を引っ張っていく時代になってきた、ということです。これは特に経済の方に研究して頂きたいのですが、なかなかそういう研究は進んでいません。

文化が経済を引っ張るという具体的な事例は、たくさん見ることができます。昨年後半から韓国へ行く人が急増して、旅行業界もその恩恵にあずかったのですが、調べてみると40代、50代の女性が増えている、皆さんご存知のようにテレビの「冬のソナタ」の影響なのです。国内では、旭川の旭山動物園が動物の展示方法を工夫したら、年間で上野動物園を上回る人が訪れ、ちょっとしたブームになっているのです。昔からの考え方ではただの遊び、つまり観光・レクリエーションなのですが、これが実経済を引っ張っている。こういう発想の中で、観光やツーリズムを考えていくと、もっと大胆な提言が出てくるはずですし、出てきてもいいと思っているのです。

今の枠組みの中で観光をどうするのだというので、例えばイミグレーションの係官を増やしましょうというテクニック論になってしまします。では、どうしたらいいのだという話ですが、これこそみんなで研究しなければいけません。社会の枠組みが違うのだとすると、極端なことを言うと、まず先に休んじやえ、遊んじやえと、そういうことから何が生まれ、どんな変化が起きるのか。

ヨーロッパの先進国、例えばイスではスキー休暇が1週間あります。それは、職場と学校が連動してお父さんと子供が同じ週に休むのです。一緒にスキーに行って、子供と滑っているわけです。その1週間を各週ごとにずらしていくのです。毎年小さな子供をお父さんが連れていって滑らせて、楽しむことから教えています。そういうことをやると、これは正直言って、日本の選手は勝て

ないなど思いました。

そういうことから人が動いて、スキー場やホテルが埋まりスキー用品が売れて実経済ができる。このような発想をもっともっと持ち込まないとダメでしょう。つまり、豊かに生きるとは何だろうというところから問い合わせなければ、「観光客数はどうしたら増えるの?」という命題を与えていたり、根本的な変化は起こらないということです。もちろん、「観光立国推進戦略会議報告書」等に書かれていることは役に立つので、こういうことはどんどんやってほしいのですが、もっともっと違う深い視点が欲しいなと思います。

そういう意味で、本当に観光にかかわっている人たちをもつとこういう会議に入れないといけないのではないかと思っています。

(小西) どうもありがとうございます。

報告書自体は、この間、新聞にも牛尾さんがちらっと紹介されていましたし、簡単に手に入るのでごらんになって頂いたらと思いますが、今、小林さんがおっしゃったように、あまり従来の枠から出ていなくて新しいことはないという感じです。ただ、枠の中でも例えば、有給休暇がどうこうというのは、有給休暇を1~12月までで計算しなくて、9~8月までとか、10~9月までというよう1年間を取ると十分消化率が上がるのではないかという気もするのですが、そういう感覚はあまりないので。

それでは、実際に寺本さんは、県よりももう少し小さな自治体レベルで地域振興や観光計画など、これまでたくさんやってこられています。それをやらながら何が課題で、今までと違ったどういうことをしなければいけないということ、2001年から始まったツーリズム研究会の成果として、どのようなことがあったのかをお話してください。

(寺本) 5年間でどれだけの成果が出たかという非常に厳しい問いかけです。

従来、私も観光基本計画や観光振興計画、あるいはまちづくり計画の一環で、府県レベルではなくて、市町村レベルの計画づくりにたくさん携わってきました。その中で、特に「観光」というものを重要視するようになったのは最近です。それまではやはり地域振興計画、あるいはまちづくり計画の中である一部として扱われただけです。有名な湯布院や有名な観光地、あるいは長浜の黒壁のまちづくりのような商店街の活性化などは、特別なことだと思います。ところが、この5年の間に観光というものが地域振興分野のメインに躍り出て、かなり重要視され出したことは確かです。

このことは、観光振興というのは非常に耳触りがよくて、今まで物見遊山で遊びだけにとられていたのが、少し掘り下げてみれば、観光振興というのは非常に役立つところがたくさんあるのではないかと、地域の人々が感じ出したのではないかと思います。ところが、観光振興の主体は役所あるいは商店街の人であり、地域の住民はその枠から外れていたのです。

そこで、少なくともみんなで作る観光計画ということで、参加型計画づくりを始めました。一般的には観光入り込み客の数を推計し、その実現のためにどんな施策をやればいいかということを計画するのですが、逆の発想をしたのです。地域の人（市民）に「観光計画を作りませんか」というような視点を中心にして、来訪者との交流、地域住民が主体の計画です。ここでは来訪者は観光客だけではありません。ビジネスで来られる人々、あるいは友達や親戚を訪ねられる人々などたくさんおられます。これがWTOのツーリズムの原点ではないかと思います。

そういう意味では、先ほど言った観光からツーリズムに移るというのは、非常に大きな分野が広がると感じます。それで、観光基本計画を作ったのですが、作って一丁上がりではありません。作るときは自治体も住民も一生懸命なのですが、でき上がればほとんど積んでおくだけです。そこで、作った観光基本計画を多くの人が月に1回でも見られるように、あるいは見なければならないよ

うに仕掛けづくりをしました。

それは、観光イベントではありませんが、いろいろな市民・住民を巻き込むことをたくさんやっていくのです。例えば観光ボランティアを作りましょう、と地域の人に呼びかけて、たくさんの人を集めます。そして、その地域の物語や歴史を勉強したり、地域をより深く知るということを繰り返しやります。そうすると、地域の人は今まで知らなかつた新しいことを発見するので、だんだん引き込まれてくるのです。これは面白いなと。観光振興がどこかへ飛んでしまって、シルバーボランティアの講習会というか、カルチャーセンターの無料版です。ひょっとしたら、「今度講師をやってください」というような話が自治体から出てくるのです。町の祭りや、うちの地域にはこういうイベントがあるとか、こういうことを伝統で長いことやってきてているのだと、地域自慢をその中でやるのであります。

こういうことをやっていくと、その先には、地域の人が地域に対して愛着と誇りを持てるような雰囲気が育ってくると思います。隣にも観光カリスマがおられるので話しくいのですが、一人、二人だけではなくて、やはり広げていくのがこれから一番大事なところだと思います。そして、そのポイントはこのツーリズムにあるのではないかと思います。

大学においてますので、やはりツーリズムというものをある程度定義しておく必要があると思います。「観光」は皆さんもよくご存知のように、もともとの語源は中国の『易經』に載っているそうです。「国の光を観る」というのは、決して物見遊山だけではなくて、文化や民俗、その国の政治・経済をよく観察することだそうです。

ツーリズムは当然、“tourism”という英語です。私はそれを“観光旅行”という日本語に訳しているところが一番大きな問題だと思います。WTOはツーリズムを「レジャー、ビジネス、その他の目的で1年を超えない期間、連続して、通常の環境、すなわち日常生活圏を離れて旅行・滞在する人々の行動であ

る」と定義しているそうです。こうなつてくるとだんだん分からなくなってきて、旅行とどう違うのだということも言われます。WTOがツーリズムを規定する三つのポイントがあるそうです。

まず、その旅行の目的にはレジャーとビジネスが入ります。あるいは他の目的も一部入ります。友人・親戚の訪問や健康・治療です。すなわち、トラベラーの目的です。

それから、期間は1年を超えてからツーリズムに入るのだということです。1年を超えるというのは、一つの期間を区切っているのですが、そこに滞在ではなくて移住する、あるいは2～3年そこに住んでしまうということになりますので、ツーリズムから外れるそうです。

そして、空間は「通常の環境を離れて」というような訳し方で、いわゆる日常生活圏、ここならば京阪神地域が日常生活圏だと思います。1～2時間で移動ができる地域であるということです。その日常生活圏から離れて旅行・滞在する人々の行動です。こうしてみると、定義をしているようで、ツーリズム自身が非常に不明確です。

冒頭から、「観光」から「ツーリズム」に変わるのはいいことだと言っているのですが、その変わる「ツーリズム」のほうがやはりよく分からない。ツーリズムの多様性だけではなくて、ツーリズム自体をもう少し研究していく必要があるのではないかと最近は思っています。

(小西) どうもありがとうございました。

休暇中に移動する人をホリディ・メーカーと言うそうです。トラベルエージェントのパンフレットではホリディ・メーカーと書いてあって、何か分からなかつたのですが、実際にホリディを楽しむ人のことをそう呼ぶらしいです。それが、先ほどの寺本さんのお話の中にあった主体的にかかわるという意味かなという気がしました。間違っているかもしれません。

次は、西村社長さんというか、町長にお聞きしますが、知事と審議官のお話に観光カリスマというものがありました。兵庫県には6人いらっしゃるということですが、そのうちのお一人が西村様です。いろいろな分野の観光カリスマがいろいろなところで出てくるようですが、観光カリスマとしてどんなことをされているかということと、特に3月1日にJRの駅の名前が変わったということも含めて、観光カリスマ、あるいはこのようなJRの城崎温泉駅というあたりのことを西村さん、お願いできますか。

(西村) 観光カリスマというのは何をやっているか、よく分からないのです。観光を一生懸命やっている、あるいは観光にもいろいろ分野があるので、そういったところで参考になるようなことをやっているのが、カリスマとして選考して頂いているのかなと思います。

観光ということを、このごろになってやっと国も県も声を大にして言い出しました。日本の行政は大体遅いです。少子化対策にしろ、観光に対する取り組みにしろ、私も今、行政の一端にいますが、10年遅れています。観光というのは本当に大事な分野だと思います。というのも、城崎町は人口が4200人しかありません。豊岡市は5万人近くの人口ですが、日本で一番かばんの生産が多いのです。そのかばんの生産の工場出荷額と城崎での観光、つまり旅館と土産物屋の売り上げが匹敵します。私はこれが工場出荷額にカウントされると思っています。

それから、雇用の効果は非常に大きいです。私どもの企業でも部屋数が130室ほどですが、従業員を300人近く雇用しています。それにつながる地元での取引をトータルしていくと、非常に大きな産業になります。その辺に行政もやつと気がついて、動き出したのだと思います。

私が町長に立候補したのは、このままではどんどん町が衰退していく、これを何とか止めなくてはいけないという思いからでした。というのは、総合計画

というものを各地方自治体で作るのですが、大体大学の先生などコンサルが作つてしまつて、町の名前だけ変えるとどこの町でも通用するようなもので、「何だこれは」と、私はこれを見て愕然として、こんなうつとうしい、いろいろなことが書いてあるものは必要ないと思いました。地域間競争の中で定住人口を減らさない、それから交流人口を減らさないという二つだけがグランドテーマで、あとは全部それに付随することだと言って、事実そういうつもりでやってきました。交流人口というのは要するに観光客ですが、交流人口と定住人口は必ず相関的に動くのです。城崎もピーク時の3割以上人口が減っています。日本中のどの観光地でも同じ状況が起きています。そういった中で、私は城崎ブランドをもう一度作り上げる、そして、「住みたいまちは訪れたいまち」をテーマにまちづくりをしてきました。

戦う武器はその町に伝わる歴史と文化と伝統、それらの総合力だと思います。ただ、自分で気がつかないものがたくさんあります。例えばこちらにポスターを張つて頂いていますが、普通、観光地であれば女将さんや芸者さんなどがポスターに出るのですが、私どもは「若だんなの会」を作りました。若だんなが二十数人いるのです。こんな観光地は日本中探してもありません。私の家内が「何で若だんなを商品にしないんだ」ということで、なるほどと。これは裸なのですが、パート1は大島の着物を着てうちわを持っています。私がまだ商工会の会長をしていたときで、私の息子も入っていますが、この大島の着物は私が「これでまちおこしをやれ」と全部皆さんに差し上げて、テレビ局がそれに乗つて、お嫁さん探しなど大阪駅のコンコースでやったものを大々的に取り上げて頂きました。これはメディア効果で約1億円あるとの評価を頂きました。

それから、こちらは3月1日の城崎温泉駅です。これはかなりテレビなどでやつたので、これも1億円の効果があると言って頂きました。私は町長になってから、合併も含めて、城崎のアイデンティティーといったものを確立する必要がある、そうしたとき、「城崎駅」ではなくて「城崎温泉駅」であるべきだ

と進めてまいりました。城崎の人間も意外と錯覚を起こしていて、城崎はほうつておいても皆さんはご存知だと思っていますが、とんでもありません。志賀直哉の『城の崎にて』という有名な小説が、日本国中の教科書にすべて出ていた時代があったのです。そのころ城崎というのは、確かに全国的に非常に有名なブランドでしたが、今はそういうものがどんどんなくなってしまって、私から見れば、城崎は非常に厳しい状況になってきています。

そうした中で、「城崎温泉」という名前をもう一度きちんと世に出す必要があるだろうということで、JR西日本に改名料として4600万円お支払いしました。これから100年城崎温泉駅というものが続くのであれば、私は1億円かけてもいいと思っていました。国鉄の城崎の駅ができたのは約100年前です。これから先の100年を考えてみたら、城崎温泉駅の改名料が1億円かかっても、100年で計算すれば年間100万円ではないか。そのぐらいインパクトがあります。実はJR西日本は民営化されたあと、非常にけちなのですが、そのJR西日本がこのポスターを1000枚近く作って、全面的に協力してくれました。

細川たかしさんが「城崎恋唄」を去年の年末に作ると聞いて、私はすぐ東京のコロムビアレコードに行き、細川さんを城崎へ連れてきて、3月1日の駅名変更のイベントをやりたいと頼みました。「城崎恋唄」の歌詞が今一つ気に入らないが、これは細川たかしさんの息子さんが作詞しています。何とか今年の紅白に出したいなと思ってはいるのですが、なぜかこの歌はいいかげんに作られているのです。作詞家が城崎にも来ていないし、細川たかしも城崎に来たかといったら、「城崎知らん、どこにあるんや」という程度です。ところが、細川さんが来るというと、前列にいらっしゃる奥様方、「たかしー」と歓声を張り上げる熱烈なファンがついてきました。大阪の新歌舞伎座で細川たかしの座長公演がありましたが、1200人収容の劇場が1か月間満席なのです。そこで必ず「城崎恋唄」を歌って頂きました。私どもも応援に行き、細川さんに何とか城崎へ来てくれというお願いをしました。これはノーギャラで、一銭も払って

いないので。「私はお金では動きません」とかっこいいことを言って、なかなか男気のある非常に親切な方です。城崎を気に入って、4月に但馬牛を食べに、これも野際陽子が出ている料理番組で取材に来て頂けるそうです。

要は、何でもかんでも、何かコネを見付けたら徹底してそれを利用する。そして、マスコミに乗せていくということを常に心掛けてやっています。細川さんがポロッと「歌碑を作ってくれたらな」と言ったので、私は二つ返事で「分かりました」。城崎の駅前に島崎藤村の碑をよけて、細川たかし（笑）。島崎藤村はもう過去の人であまりご存知ではなくて、今、城崎では細川たかしのほうが有名です。そうしたら、細川さんはうれしくて、あちこちで「城崎温泉、おれのふるさと」。本当は北海道の真狩村なのですが、「歌碑があるよ、見に行けよ、すてきだよ、いい町だよ」ということで、大変な効果です。100万円かけて作りました。というのはうそで、これも内緒で本当は30万円ですが、細川さんには100万円と言っています。

手持ちの町の材料をすべて観光に、戦力に変えていきました。「花街の母」を作詞した、もず唱平先生は城崎が非常に好きで、これまた「城崎情話」という歌を昨年世に出して頂きました。城崎に欲しいものは芸者と人力車と三味線の音だというので、「分かりました」とこれも二つ返事で、今、芸者ウォーカーというのをやっています。これは偽芸者で、コンパニオンにかつらをかぶせました。三味線については、城崎ではドボルザークの「遠き山に日は落ちて」のチャイムだったのですがやめて、「ここは山陰城崎駅よ」というものに町長の権限ですぐ変えました。それから人力車も走らせています。これもイメージづくりです。こういったイメージを常に旅行マーケットに訴えていくということが大事ではないかと思います。

長々としゃべりましたが、いろいろなことをやって、地域の皆さんに我が町の歴史と文化と伝統を振り返って頂くと共に、それなりにマーケットを刺激したかなという想いでおります。

(小西) どうもありがとうございました。

少しようすを変えて、今度は奥村先生に、神戸大学の地域連携推進室について説明して頂いて、その機能と、これからそれがどのように動いていくのか、地域連携といつても相手方はどういうところを想定しているのか、というあたりをご説明してください。

(奥村) 神戸大学では、教育と研究と並ぶ第三の使命として、社会との連携及び協力を重視していくこととしており、社会文化に関する連携事業については、平成15年10月に「地域連携推進室」を設け、地域とともに生きる大学として自治体や地域団体等と連携事業を積極的に進めています。「地域連携推進室」は、自然環境、文化、歴史など地域の有する自然及び社会的資産そのものの価値を高める基礎研究と地域への還元、地域コミュニティの活性化のための医療、教育等の実践的研究とその成果の地域への還元を中心に活動しています。それぞれの分野は、文学部、農学部、医学部保健学科に設けられた地域連携センターや、発達科学部の子育て支援事業や経済経営研究所での地域でのツーリズムについての支援などを展開しています。特に教育研究機関として、地域再生のための実践的な事業例の開発、人材の育成に力を入れています。

地域連携推進室がでてまだわずかですが、これまで各部局で個別的に進められていた事業は大きな成果を収めており、それを総合大学にふさわしい形で全学的に支援しております。今日はツーリズムが課題ですので、まちづくりからツーリズムにつながっていくよう大学の地域連携についてご紹介したいと思います。

神戸大学と小野市との間で、この2月に歴史文化に関する3年間の包括的な協定が結ばれました。これを事例にお話をしたいと思います。実は、小野市と加西市、滝野町にまたがる青野ヶ原台地には、第一次大戦のときにオーストリアの兵隊が入っていた俘虜収容所がありました。第一次大戦のとき、中国の青

島でオーストリアの戦艦が日本軍に拿捕されて、その乗組員が日本にやってきたわけです。

第二次大戦期の俘虜（捕虜）の悲惨なイメージと違って、第一次大戦のときには、捕虜生活の困難があるとともに、その一方で地域との交流がありました。有名なのは鳴門市で、現在、ドイツ館という立派な博物館施設を持っていますが、同じようなところが日本中で10か所ぐらいあります。小野市については研究がほとんどなかったのですが、小野市史の編纂時に収容所のことが再発見され、なお現地に当時の建物が存在することも分かりました。現在の地方自治体は、ほとんどのところで市町村史を作りますが、大体作ったあとは、それを担当していた市役所の部局が解散となり、ほったらかしになっているところが少なくありません。先ほどの総合計画の話と同じように、せっかく作ったのにそのままになっていることがあります。私たち歴史研究者も力を入れて作るのですが、活用についてはあまり関心を持たないということがあります。

小野市の場合は、市立の歴史博物館である「好古館」の館長さんが、ここ数年、博物館を地域の人々にもっと親しんでもらって、活性化させようと努力されています。その中で10年かけて作った小野市史の成果を活かそうという形が進みました。そこで、俘虜収容所の話を大学と連携して、これを地域づくりに活かせないかという話が出されたわけです。私は小野市史の近代編の担当者でしたが、再度、文学部の西洋史の大津留厚先生等と調査したところ、いろいろなことが分かつてきました。

ちょうどその俘虜収容所で音楽会がありました。鳴門市のドイツ館は、日本で第九を初演したところだということで有名なのですが、小野市のはうはオーストリアの捕虜だったので、むしろ管弦楽や室内楽が中心だったということが分かりました。そして、日本ではほとんど上演されていないものが出てきました。それをもう一度神戸大学の交響楽団に復元してもらうことになっています。本来は管弦楽ですが、軍楽隊なので管楽器での復元演奏会を10月に小野市で、

博物館の特別展の一環として行うという取り組みを大学としてもやります。

現在、俘虜収容所の状況を地域の中で聴き取っていくという作業をしています。それこそ今から80年ぐらい前の話なので、ほとんど分からなくなっていたのですが、どうもそのころオーストリアの兵隊さんが作ったものを販売していました。そうすると、いろいろな写真機やビリヤードの台や布製の飾りなどが出てきたので、そういうものも通じてもう一度地域の歴史を考えようということになってきています。地域の方々のところに博物館の館長さんが出掛けて、地域の人が大人から子供まで参加して、自分たちの地域の歴史を博物館を使って展覧会をするというユニークな取り組みであり、私たちと大学の側も一緒にその準備をしています。

技術的な移転で言うと、姫路は皮革の中心ですが、収容所の捕虜が皮革の技術を伝承したことが分かってきました。それから、お菓子職人がたくさん出ているのです。このころはまだはつきりしないのですが、どうもそのお菓子職人は神戸のお菓子と非常に重なっていることが分かってきています。ずっと話は広がっておりまして、それを活かしてこのまちづくりをやっていくという話と、収容所は全国に広がっているので、鳴門などとの交流を広げるという形で次々に新たな事業のイメージが生まれ、展開しています。自分たちの地域を基礎に他の地域へも足を運ぶ、これもツーリズムの一つではないかと思います。

地域の歴史・文化の一番基礎の部分を地域の人と一緒にもう一度確かめていったり、つかんでいったりする作業が非常に大事です。しかしこれまではどうしても研究者だけが市史を作つて、それで終わりという場合が多かったわけです。自治体史ができたあと、さまざまな地域や海外にもつながる交流の在り方を再発見し、自分の地域の歴史や文化に関して再認識し、まちづくりや地域づくり、それからへとつなげていく、そのような過程を学問的に支えていく役割が大学に求められているわけです。

観光地に行くと、必ずお宝を置いてある博物館的な場所があります。しかし

そのほとんどは、「勝手に見ていいけ」というようなところが多いわけです。一部、まちづくりと絡みながら、その地域の人たちが自分たちで解説するようなところが、先ほどの寺本さんの話からも出てきていますが、まだまだ少数ですし、地域リーダーと言ってもいいですが、そういう人たちが、解説するための基礎的な能力をつけていく作業は、大学などが非常に大事にしなければならない部分ではないかと思います。また必ずしも歴史の専門家ではないが、歴史文化に携わるリーダーと行政や企業をコーディネートしていく人材の育成も、大学にとっては、非常に大事な分野ではないかと考えています。

(小西) どうもありがとうございました。あとで今のお話に関連して、実際にやっていらっしゃる人がたくさんお見えのようなので、ご質問があるかと思います。

次に、江木部長にお聞きしたいのですが、観光協会からツーリズム協会に変わりましたよね。実際何が変わったのでしょうか。それから、今のツーリズム関連統計というか、観光関連統計については兵庫県の場合は、神戸市という政令指定都市があるので、兵庫県のデータは神戸市を除いて推計されて、あとで合算して兵庫県全体の合計という形になっていて、その辺りは少し不備があるのではないかと思うのですが、そういうものを何とかするために、World Tourism Organization (WTO) の中に提案しているツーリズム・サテライト・アカウント (Tourism Satellite Account : TSA) というような定義を使ってやってみようというお考えがあるのでしょうか。

(江木) まず、3年前の平成14年度に「兵庫県観光連盟」から「ひょうごツーリズム協会」に変わりました。何が変わったかというと、名前が変わりましたというのが正直なところかもしれません。とにかく新しい取り組みをしようということで、挑戦したのですが、やはり下に古いものをはいでいるので、もう

一つ活きないというような状況ではないかと思います。

メンバーもツーリズム協会になって、従来の観光関連産業だけではなくて、ものづくり産業の方にも入って頂いて、形は変わりつつあるのですが、関係者全体で本質の理解がまだまだ不十分なかなという状況です。しかしその中でも、産業ツーリズムという取り組みの中で、他の地域にない兵庫の観光ツーリズム資源とは何だろう。やはり兵庫の強みはものづくり産業にあるので、それをツーリズム資源として活用していくと、今、228施設をこのパンフレットに載せています。そんな取り組みが徐々に進みつつあります。

どうして観光ツーリズムが地域を挙げての取り組みになかなかならないのか、知事自身も全国で観光カリスマ100人で、県内に6人と非常にウエートが高いのにと言いつつ、何かもぞもぞと言って首をかしげていたところがありました。正直、行政の我々もそうかもしれません、観光ツーリズムに対する民間のパワーや勢いのようなものを感じていないのです。それはやはり背景に阪神工業地帯や播磨工業地帯という重厚長大型の産業を持っていて、生活自身に安定したものがありました。別の言い方をすれば、老舗産業を持っていたので、その暖簾にあぐらをかいていたのかなと。我々自身もよく感じるのは、観光ツーリズム関連業の方から言われるには、東北や九州では観光ツーリズム産業が地域の主要産業になっているので、町全体でお客様を迎えるようという、いわばホスピタリティが自然に生まれています。東北、九州はDNAの中にもお客様を迎えるようというのが組み込まれているのではないか。それがやはり東京や大阪、神戸などでは、どっしりとした産業自身があるので、別に人が来なくてもいい、ほうついていても来るというようにあぐらをかきすぎているのではないかとよく批判されます。

かつてパーマネントもカラオケもバレンタインデーも、神戸が起こした一つの現象です。最近は観光ツーリズム産業だけではなくて、ものづくり産業ですら、兵庫発・神戸発というものはほとんどありません。インターネットで調べ

てみたら、1970年ぐらいのファッショングループ（ニュートラディショナル）があり、もうそこまでさかのぼらないと兵庫発・神戸発のものがあります。どうもすべての分野であぐらをかきすぎていたのではないかなど感じました。もう少しハングリー精神で、チャレンジ精神を持つ必要があると思います。

一つだけその例を言うと、今、人口減少時代と言われていますが、日本の人口は1億2600万人です。2050年には1億人を割るのではないかと言われています。兵庫県でも2050年には450万人です。かたや中国は、現在12～13億人で、2050年には17～18億人になります。人口パワーの差を見ると、今は日本と中国が1対10で、これが2050年になると1対18とか、下手をすると1対20ぐらいで、人口パワーから見ると半減してしまいます。これは数が違うだけではなくて、経済や文化などで人口パワーの差が出てくるのです。要は、この近隣の中国と比べるだけでも、日本は、地域あるいは経済を活性化するためにも、もっともつと質を高めていく努力が必要です。それが今のところはないのかなという感じがします。

今、私どもが必要なのはホスピタリティ、あるいは人を集める仕掛けに磨きをかける兵庫県のパワーをいかに集めていくかということは、県だけでできることではありませんが、皆さんの知恵を集めてそういう仕掛けを作ることがこれから課題かなと思います。

統計の話が出ましたが、これは阪神・淡路の震災で取り組んできた検証の中でも、兵庫県の統計というのは正直、端的に言うといいかげんです。県がいいかげんというより、各市町の作られたものを集計しているだけなのです。その作られているものが各市町によって若干基準が違っているし、もっと言えば、兵庫県のものと大阪、京都のものはまた違います。その質の違うものを合算したり、比較したりしているので全く意味がないのです。

自分で言うのもおかしいのですが、知事が「観光入り込み客を2005年には1億5000万人にしたい、それは非常に難しい」と言っていましたが、今の手法

ではひょっとしたら難しいのかもしれません。今はほとんどJR駅の乗降客や有料施設の入場者を集計したものだけになっているので、新しい要素のものが各市町などはその中にあまり入っていません。仮に入れたとしても、それはみんなばらばらなのです。我々がまとめたものを知事が言っただけなのですが、まとめながら、正直いいかげんなものだと思っていました。

いずれにしても、これから兵庫県だけではなくて、各府県も含めて、それこそ鷺頭審議官がおられたらいいのですが、日本全体でこの統計をどうするかをもう少しきっちり議論しないと、単に各県が適当に「うちは増えました」「減りました」と勝手に言っているだけの話で、あまり意味がないのかなという感じがします。これは反対に、我々はそういうものを十分に認識していて、国への働きかけ、あるいは他府県への働きかけも含めて、いずれにしても基礎データになるものなので、しっかりとその手法も含めて検討させて頂きたいと思います。

(小西) どうもありがとうございました。正直にお話してくださってほっていますが、一方では、しかしそういうデータに基づいていろいろな計画を立てたり、お話をされて堂々とおっしゃるというのはどうしたものかなと。今まで何を聞いていたのかなという気にもなるわね、というようなところがあります。

それはそうとして、国土交通省を中心にしてデータを整理するという方向には向かいつつあって、特にインバウンドツーリストについてはだいぶ進んできているというところです。World Tourism Organizationが提案している数字の作り方が、10表ぐらいあります。そのうちの2表は当面作らないと。しかし、6表については昨年（2004年）11月のレポートぐらいで大体できたという話になっているようです。ですから、少しずつ進みつつあるのだろうと思います。

あと、大学とのこういう分野においての連携というお話をどなたでもいいの

でお聞きしたいのです。例えば、西宮から灘というのはお酒ですね。有名なところで出荷額も日本で一番だというのですが、「地酒」と書いてあるところに地元の酒はないのです。あれは地方の酒のことを地酒と読むのかなと思うぐらいです。そんなところは、社会科学や人文科学のようなところの連携だけではなくて、技術的な連携もやって、そのブランド品というかイメージというのは、西村社長もおっしゃいましたが、非常に重要だと思います。ですから、イメージが崩れないうちに、本当は実態がないとしても、それがはっきりしないうち、見付からないうちにと言うとおかしいですが、きちんとやっていくということに大学が役に立ちそうではないかという気がします。あるいは産官学、民といったことで一緒にやっていけそうな可能性があるのではないかと思います。

一言ずつ、今度は江木さんからお願ひできますか。

(江木) 私が観光地等々を見ていて感じるのは、案外地元の魅力というのは地元の人が気づかない場合が多いです。反対に、大したものではないのに自分たちが入れ込んでいると、お客様のニーズ関係なしに「これはいい」と思い込みすぎて、なかなか人が来てくれないこともあります。要は、観光ツーリズムはなかなか客観的に評価できないという状況にあります。これも震災検証の中で、全くできていないのではないかという評価をされたのですが、要は、ユーザーのニーズをつかむ努力がほとんどされていない、マーケティングがほとんどされていないということがありました。これは地域内の身内同士で話すと、「おまえ、そない言うけどなあ」という話になってしまって、そもそも大学の中でそういう客観評価や、これからの方針について、地域との連携、あるいは大学の知恵の地域への移転のようなことを大学に果たして頂ければ非常にありがたいです。テクノロジーの分野では相当進んでいますが、経済・経営、あるいはこういう地域づくりという面ではこれから、私どもの橋渡しのほうも、昨年、産学連携担当理事までできたのですが、まだまだ不十分なところ

があります。これから行政としても頑張っていきたいと思います。

(小西) 続いて、奥村先生、お願ひします。

(奥村) 統計の生々しい話をありがとうございます。私たちは歴史を研究する中で統計書の史料としての不十分性について議論をすることがあります。実際上、きちんとした統計書を作ったり、先ほども出たような基本的な地域像を深めていったりするためには、地域の一番基礎的な部分を住民と行政との間で共有していくことなしには進まないということだと思います。そしてこのような基礎的部分をしっかりと支えるには、地域団体や自治体、NPOとが相互に責任を負える体制ができていることが常に大事で、それがないと、長期的に地域を支えて、地域の深い認識に支えられたツーリズムを展開していくことはできないと考えます。どんな形でこれに参加していくのか、大学にとってそのことが実践的な課題となっています。

もう一つは、県にお願いしたいのは、兵庫県の場合は地域によって相当の差があるので、今そういうことを支える機能が県には弱いように思います。やはり歴史・文化にかかわるようなものも、地域づくりのものについてもそうだと思いますが、もう少し小さい幅で日常的に相談したり、議論したり、データを持って頂いたりするようなシステムを作つて頂ければ、住民にとって非常に役立つのではないかと思っています。

(小西) 西村社長さん、町長さんとしてのほうがいいでしょうか。城崎町では歴史的なかかわりもあって、早稲田大学との関係があります。最近も早稲田大学の人と一緒にいろいろやっていらっしゃるということですが、少しご紹介して頂けますか。

(西村) 先ほど、観光はまちの総合力だと申しましたが、その一つの例として、城崎は太田垣士郎という関電の初代社長のご出身の町です。今の関電の社長クラスが、直接でやっと太田垣さんの後ろ姿をちらっと見たぐらいの人です。私は太田垣さんをもっと前面に出さなければいけないと思って記念館を造り、関電グループの聖地にしたいと考えました。関電の歴代社長、重役さん全員、あるいは新入社員も城崎に必ず一度来なければならないというぐらいの思いを持って、太田垣士郎記念館を造りました。すべてそういった観点で、こじつけかもしれません、ネットワークを作っています。

今、先生がおっしゃったようにその一つとして、早稲田大学との取り組み、その前に同志社女子大学と取り組みをやりました。この10年続けて、同志社女子大学の学生さんを9月に40人ぐらい城崎にお招きしています。そこで旅館のお手伝いをして頂きます。現代社会学部の学生さんですが、授業のカリキュラムの中に組み込んで単位にカウントされるということです。具体的には、お客様のお出迎え、お掃除、メイドさんのアシスタントといったことを実学の中で体験して頂くのですが、地学協働という形でやらせて頂いています。これは非常に人気で、募集をすると大変な数の人が来られます。そうした中で城崎のファンを作っていく、ネットワークを作っていく。1週間ぐらいですが、帰られるときには涙で別れるのです。

あとは、今ご紹介があった早稲田大学ですが、城崎は80年前の5月23日に北但大震災に襲われて、全町が全滅し272人が亡くなっています。そのとき、私の祖父が町長をしていました。祖父も早稲田（東京専門学校）の出身です。当時、政権党にいた斎藤隆夫代議士は出石のご出身で、私の祖父が斎藤先生の後援会会長をしていて、斎藤先生から非常に潤沢な復興資金が流れてきました。この方も苦学をして早稲田を出て、エール大学まで留学され、代議士になられた「肅軍演説」で非常に有名な方です。当時の早稲田には高田早苗という非常に有名な総長がいらっしゃいました。そういういた早稲田グループが、私の祖父

から斎藤先生経由で高田総長、そのとき町の復興計画に入ってきて頂いた方二人の一人は岡田信一郎という芸大の教授であり、早稲田の講師でした。代表的な作品としては東京の歌舞伎座と、明治生命の本部ビルです。これは非常に素晴らしいもので、いまだにあります。大阪の中之島公会堂の基本設計も岡田先生がされました。大正から昭和にかけての日本を代表する建築家です。もう一人は吉田享二先生ですが、この方は但馬のご出身で構造の専門家です。この二人が入ってきて、城崎の都市計画から外湯からまちづくり、小学校、全部やって頂きました。

早稲田の建築というのは非常に有名で、人材が日本国中に広がっています。私の又従兄がやはり早稲田の建築出身で、今、筑波大学の教授をしていますが、彼に連絡を取って、早稲田というナショナルブランドを使って城崎をPRしたいということで、これもすべていろいろこじつけてやっています。それにすぐ答えて、後藤春彦先生という方が来て頂くことになりました。後藤先生は岡田先生から見るとひ孫弟子ぐらいになると思いますが、今、後藤研究室と組んで、中心市街地活性化計画、「城崎このさき100年計画」を作りました。

兵庫県立大学からも同様のオファーが来て、先程契約をしました。これは新市に引き継ぎますが、やはり大学と組んでいろいろな若い人たちとの交流、大学自体が実学といった部分での取り組みということで、神戸大学さんもいろいろおやりになっているようですが、そのようなことを城崎は積極的に仕掛けてやらせて頂きました。町の職員も作業に参加する町の若い世代もこのようなことをやることによって、非常にモラルがアップします。

早稲田についてMIT（マサチューセッツ工科大学）も入ってきました。世界のMITが入ってきて、その学生さんたちとも交流ができました。彼らから見たまちづくりは視点がはつきりしていて、非常にシンプルな見方をします。あまりごちゃごちゃ考えません。日本人以上に日本的な見方です。例えば神社仏閣、それから小高い丘があって、それをホーリーアイランド、「聖なる島」だ

という言い方をしました。我々は気がつきませんでした。昔、城崎はまだ海の底でした。そこにぽつんと島らしきものがある。現在もそこにお社がありますが、これはホーリーアイランド、「聖なる島」だということで、非常に感銘を受けました。去年もMITと早稲田の学生が来て1週間合宿をしました。

そういういろいろな連係プレーを取りながら、楽しく、町民と職員ももう一度町のルーツ、歴史と伝統と文化を思い出しながら、まちづくりを再現していく。お手元に出ていますが、去年、オランダのライデンとドイツのミュンヘンに、町民の視察団を募ってシーボルトが持て帰った城崎の伝統工芸品である「麦わら細工」を見に行かせました。職人さんも同行し、「麦わら細工伝承館」に今展示している100点に加えて、シーボルトコレクションのリメイクしたものをおこに並べる計画です。もう一度、我が町のルーツをみんなで検証しようということではないでしょうか。

(小西) それでは寺本さん、大学とシンクタンクを両方ご存知なので簡単にお願ひします。

(寺本) 地域連携という分野で、大学自体の果たす役割というのは、それぞれの大学によってスタンスが違うと思います。神戸大学は地域という限りにおいては、少なくとも兵庫県全体を考えなければなりません。小さな私立大学では、地域の発展と大学とのかかわり、あるいはよく言われる産学連携は非常に重要なテーマになってくると思います。昨今は、大学に観光学部あるいは観光マネジメント学科ができています。そういう意味では、観光産業、あるいは大きくツーリズム産業に就職して活躍される人がこれから育ってくるのではないかと思います。

ツーリズムにおける地域連携の課題として、二つお話をしたいと思います。一つは観光統計です。国内には信頼できる包括的な観光統計がない。経済産業省

が所管している鉱工業生産統計が整備されて初めて、実情を把握し、適切な産業政策が実行でき、日本の産業あるいは経済がここまで発展したとよく言われます。そういう意味では、国土交通省が観光立国を標榜するのならば、観光統計をきちんと整備して、それを大いに活用していくことが非常に大事だと思います。先ほど江木さんのお話にあったように、観光という言葉は非常にあいまいなので、できれば観光統計をやめて、ツーリズム統計という新しい切り口で統計を作成する。大学も今度はツーリズム統計を積極的に活用し、統計の基準が統一されることによって地域間の比較が可能になると思います。

例えば府県レベルならば、総観光客数（平成14年度）は、兵庫県が1億1000万人、大阪府は1億4000万人、京都府は6000万人で、それを全部足せば、3府県だけで3億数千万人になるのです。しかし、集計方法の違いなどにより単純比較はできません。当然、兵庫県と神戸市も、大阪府と大阪市も、京都府と京都市も同じ問題を抱えています。ですから、統一された基準によるツーリズム統計の整備がぜひ必要です。

もう一つは、観光という言葉は非常にいい言葉なので、まちづくりに観光を使うということです。「観光まちづくり」というのは、先ほど町長のお話にもありましたが、非常に重要な要素を含んでいます。そのキーワードは三つあります。地域住民、地域資源、そして来訪者です。観光客だけではありません。その地域を訪れるすべての人なのです。今後は、地域連携を強化し、来訪者との交流による「まちづくり」を進めることが重要だと思います。

(小西) 最後になりましたが、小林さんに特にTSAの統計のことをちらっと言ってもらいましょうか。

(小林) 今日、兵庫県が「観光からツーリズムへ」変えているというお話を聞いて、これはすごくいいな、「どつかでしゃべったろ」と思ったのですが、

実態のお話を聞いているともう少し待ったほうがよさそうですね（笑）。ただし、実態が先か、形が先か、どちらが（先が）いいか分からないので今後の兵庫県の動きには期待はしています。

では、そもそも観光は何なのかということですが、観光というのは文化的活動なのです。文化的活動とは、その時代その時代の人々がいいと思ったもの、つまり価値があると共通に考えているモノを見に行きたがるということです。昨今の人々がいいと思っているものとは何かというと、例えば、人々が頑張つていい地域を作ろうとしているのを聞いたり、見たりして、「これ、ええやないか」「そういうところへ行ってみようじゃないか」ということになるわけです。ほんの少し前までは、気晴らしや気分転換で人が動いていたのですが、そうではなくなってきています。だからこそ、結果として人が動くようなことをみんなで協力してやろうではないかというのが、多分今後の地域のツーリズム協会のやることだろうと思います。ですから、単なる観光誘致プロモーションではないのですよということです。

お尋ねのTSA（Tourism Satellite Account）についてですが、これは観光統計の国際基準ですが、これが大事なのは、これができたお陰で国際的な観光統計の比較ができるということなのです。新しい世界共通の基準でもって、その地域、国も含めて観光がどれぐらいの役割を果たしているのか、きちんと測ろうというものです。現在、日本の各地でとられている観光統計は、先ほど各先生が指摘しているように不備な点が多く、定義もまちまちで、まずもって本当に人がどれぐらい来ているか正確には分からぬのです。もう一つ、観光の経済効果を調べようとしても、産業連関表という、ある産業がいろいろ他産業との関連でどのようにお金が回っているのか示しているのですが、これが観光絡みではまだ整備されていません。ですから、若干まだ難しいのですが、TSAという新しい考え方を用いて観光の地域の総生産高に占める割合を比較すると、国と国の間、あるいは地域間で、どれぐらい観光が役に立っているのか、また

他産業と比較してどうなのが分かるのです。

例えば、我々の調査では、沖縄県の観光関連産業が県内総生産の7%に達していることが分かりました。これは、日本全体でみた数字の3倍で沖縄における観光産業の重要性が理解できると思います。また、この7%というのは、県内の運輸・通信業や行政によるサービス規模に匹敵するシェアを占め、農林水産業の3倍強に相当しています。

これだけ観光、観光と騒いでいるのですが、西村町長のように観光に直接かかわっている方が首長になっているところは、日本の自治体の中で非常に少ないのです。多分、このTSAのような手法を用いて、きちんと観光産業の重要性が分かれば、「我が町は観光の代表者を首長にしなければいけない」という雰囲気が出てくるのではないかと期待しています（笑）。

最後に、大学の関係で私どもが期待しているのは、やはり観光の経済効果に関してですが、お金の動きというものを用いて示さないと日本人はなかなか納得してくれないので経済効果ということが大事なのですが、大切なのはその先なのです。つまり、お金に換えられないものの価値をどうやって経済的価値として計算していくのかということです。多分、こういうことが理論的に立証できていないかないと、観光はよくなりません。なぜかというと、これから観光を考えていく場合、私（し）と公の関係をどうしていくかということが、今の景観法などもそうですが、もっともっと問われてくるのです。そのときに、景観や環境といった公共財としてのいろいろなものの価値をどのように評価していくかをきちんと理論化できないと、私（し）と公をどのように折り合いをつけていいか。観光というのは大事なのだ、しかし、そのためには私（し）の権利をどこまで我慢してもらうかというようなことがこれからいろいろ起こってくるのですが、その裏付けとなる理論がなさすぎるのです。

今回、経済・経営の研究所がこのようなツーリズムセミナーをやってくれることを非常に期待しているのは、そういうものの理論化を考えて頂ければ観光

が進むということで、大学の役割に大変期待しています。

(小西) どうもありがとうございました。

最後に大変なお話がありましたが、基調講演のときに質問を受けられなかつたので、ここでお一人かお二人何かご質問があればお受けしましょう。特に地域でやっていらっしゃるというお話がありましたよね。どなたにお聞きしたいかということをおっしゃってください。

(質問者・亀田訓生) 総括的なお話で非常にいい勉強をさせて頂きました。今日のご講話を聞いて二つお教えください。

一つは県知事井戸様のお話に、具体的にバスの観光の助成をしているというお話が出ていました。私はちなみにNPO法人に6年半、博物館・美術館等、いわゆる企業ミュージアムを日本で最初に立ち上げて、今日まで毎年150～160万の赤字を出しながらやってきています。そういうガイドブックも作って、全国津々浦々590ぐらいをネットワーク化しつつあります。それを神戸大学にぜひ中心テーマとして取り上げてもらいたいとかねがね思っています。その具体的実践の機会を、要するに社会文化の向上、地域活性化のためにということで、バスを非常に重視していましたが、去年そのバスをお願いしたら、もう満員になっていたということでした。

その満員よりも私が一番問題にしたのは、我々は全国で活動していますが、まず大阪に集まって、それで兵庫県に観光に行こうという起案をして実践しようと思ったのです。すぐ電話をしたのですが、ツーリズム協会のほうで兵庫県民が利用する団体だったら受ける価値があるというのでしょうか、そういう歯止めがあります。おたくさんは吹田に本部があってと。ところが、先ほどの知事のお話に、韓国のツアーでも近畿一円4県わたって1週間で帰るような状態だということでしたが、そういう助成は少なくとも県民の枠ということですが、

広域の枠というのも助成策を考えるときに、ぜひ設けて頂きたい。また、今年もやられる場合は我々も参画したいと思っています。

(小西) すみません。時間の関係もあるので、一つでお願いできませんか。

(江木) 県民でなければだめということですが、バスはいろいろなものがあります。例えば県民の方が県内の施設を3か所以上回ってもらったら、1泊してもらうと10万円、日帰りだったら5万円で、広い意味ではツーリズムバスですが、固有名詞でいう「走る県民教室」が各県民局にあり、それは県民に限定しています。私ども産業労働部のツーリズムバスは、ツーリズム協会が受け付けていますが、これはどちらかというと、県内で神戸から明石に行くのにバスを使って、それに補助金を出すということはあまりツーリズム客誘致では意味がありませんが、県外から来て頂く方を応援しようという「ひょうごツーリズムバス」があります。

このツーリズムバスは姉妹提携をしている中国・広東省をはじめ海外の方も利用できます。また、「産業ツーリズムバス」というのもあり、県内外を問わずに応援するものです。さらに来年度からは、これから若者の職業意識を高めるために、仕事体験のようなものを味わう「仕事ツーリズムバス」というものを予定しています。このように全部引っこくるめると、県内外の人を問わず、いろいろな目的で使って頂けるものがほぼメニューとしてできていると思います。一度、ツーリズム協会や県民局にご相談頂ければ。ただ、予算に限りがあるので、ぎりぎりだと満杯になる可能性があるので、できるだけ早く申し込んで頂ければ、大体対応させて頂けるのではないかと思います。

(小西) どうもありがとうございました。

何人かをと思ったのですが、時間を長く取りますので、あとは交流会でお話

しください。ということで、今日のお話がどれぐらいご期待に添ったものになつたか分かりませんが、方向としては、観光からツーリズムという形です。我々経済経営研究所でアウトプットしているのは、こういういろいろなタイプのツーリズムがありますよというのが2年ほど前に出ました。また、ツーリズム関連統計にかかるいろいろな現状と課題というようなものを印刷しつつあって、今月中に出る予定です。ご関心があれば見て頂きたいと思います。

今日は最後までご参加頂き、ありがとうございました。パネリストの皆さんにも私が十分お話を聞きできなかつたところもあるかと思いますが、いろいろご示唆頂き、ありがとうございました（拍手）。

（司会） ありがとうございました。

どのテーマでも熱のこもつたお話を頂戴し、少しずつお時間をオーバーしてしまって、会場の皆様のお話を伺う十分な時間がなくなってしまい申し訳ありませんでした。

今日、パネリストでお越し頂いたのは、兵庫県産業労働部長の江木耕一様、神戸大学文学部助教授、奥村弘、兵庫県城崎町長で株式会社西村屋代表取締役社長の西村肇様、太成学院大学教授、寺本光雄様、財団法人日本交通公社理事・観光マーケティング部長の小林英俊様でした。どうもありがとうございました（拍手）。

最後にコーディネーターは、神戸大学経済経営研究所教授の小西康生でした。

それでは、神戸大学経済経営研究所長の山地秀俊が、第Ⅰ部、第Ⅱ部の閉会のごあいさつを申し上げます。

閉会の辞

山地 秀俊

皆さん、長い間ご清聴ありがとうございました。我々神戸大学も、今年度より独立行政法人になって、地域連携活動の強化に取り組んでおりまして、その一環として、経済経営研究所は今日のようなフォーラムを逐次開催していくたいと思っております。今日、私は所長とカメラマンの二役をやっておりました。私は写真が半分専門でして、風景写真の意味なども研究しております。風景を撮るのではなくて研究しているほうでして、そういう意味で観光には興味があるのです。

少し大きな話をしますが、20世紀最大の発見は何かと言ったときに、学者グループの中には「言語だ」と答える人々がいます。「自分が自分であることを可能にするのは言葉だ」ということが発見されたのは20世紀になってからです。このことをこのフォーラムの今までの議論に少し当てはめて私なりに考えてみると、シーンというか、スペースをいくら見せても、それは観光にはならないし、見せ物にもならないわけです。では何を加えればいいのかといったら、見る対象をより魅力的なものに改善すればよいというのも一つの考え方のかもしれません、私が披瀝した発想から言いますと、実はシーンやスペースと個人をつなぐ言葉をつけ加えてやることがいちばん重要なのです。例えば、健康にいいとか、まちづくりなど、こうした言説は、皆そのシーンやスペースに言葉をつけるという行為によって、ランドスケープ、すなわち見る価値のあるものに変えていっております。これは言語活動の非常に重要で大きな役割です。

卑近な例を言いますと、今から20～30年前にワインが爆発的に売れた時期が

あります。ワインの味が急によくなつたわけではなく、たつた一つの言葉がその火つけ役になつたのだと言われております。「金曜の夜はワイン」という言葉です。それまで日曜日だけが休みだったのが、土日が休みになつて、金曜日の夜が「華金（はなきん）」と言われ、いわゆる週末になつたわけです。そのときに、世の亭主族はまだ金曜日の夜に何をしていいか分からなかつたのです。そのときに、「金曜の夜はワイン」という言葉がついたのです。今まで赤ちようちんをくぐっていた人が、ワインを買って家に帰りちゃぶ台で古女房とワインを飲み始めたのです。それでワインが売れ始めました。ワインの味がよくなつたわけではなくて、言葉をつけて、ある歴史的環境下の個人とワインとをつなげてやつたわけです。

観光問題も同じことが言えるのではないかでしょうか。言語をつけてやることが非常に重要で、それによって個人は観光対象に対して主体化されて、多くのものが主体的に出掛けていくことになる、そのような解釈も可能であろうと、パネリストのご意見を聞いて理解していました。大きな間違いを犯しているかもしれません、言葉というのが非常に重要で、それをつけるのが大学の役目です。キャッチフレーズをつけるのが役目という意味ではなくて、先ほどの奥村先生のように、歴史などで大きく言葉（物語）をつけてやることによって、スペースが、ランドスケープになるのです。スペースはどんなに物理的にいじくってもスペースにすぎません。それをランドスケープにするのは言葉なのだと、ある意味でそういう感じがしました。

少し長くなって恐縮ですが、そういう形（言葉・物語をつける）でこれから大学の役割をどんどん果たしていきながら、研究所もその一駒としてフォーラムやセミナーを開催していきたいと思います。「経済経営研究所」といいます。少し長い言葉で恐縮ですが、それこそ言葉を覚えて帰つて頂いて、折あるごとに「神大の経済経営研究所ってなかなかおもしろいことをやつているらしい」と言って頂いて、これからも我々を引き立てて頂きたいと思います。

今日はどうもありがとうございました（拍手）。

（司会） 皆様、長時間にわたりご参加ありがとうございました。

皆様にお渡ししています封筒の中にアンケート用紙が入っています。ご支障のない範囲でご記入のうえ、右手前方の出口の箱にお入れ頂いてお帰り頂けたら幸いです。その際、交流会にご参加にならない方は、名札も一緒に係りの者にお渡しください。よろしくお願ひします。アンケートは次回の開催についての参考にさせて頂いたり、お知らせなどに活用させて頂くように考えています。

さて、Ⅲ部にご参加頂く方は、この会場を出られて右手にあるアカデミア館3階レストラン「さくら」にご移動頂けますでしょうか。

長時間、どうもお疲れさまでした。このあと、「さくら」にいらっしゃる方はもうしばらくおつきあい頂き、Ⅰ部、Ⅱ部でお帰りになる方は、どうぞお気をつけてお帰りください。長時間ご苦労さまでした。

おわりに　－今後の展開方向－

多数の参加者を得て、第1回の「神戸大学　ツーリズム・フォーラム」が開催できた。ここで第1回と断ってあるのは、今後ともこのようなテーマでの研究を進めていき、神戸大学あるいは同経済経営研究所をツーリズム研究の中心として育てていこうと意図しているためである。早速、2005年8月25日には当研究所の下村研一助教授を中心となったコンファレンス「奄美経済コンファレンス　－ツーリズムと離島経済の持続的発展を考える－」が開催された。また、第2回目の「神戸大学　ツーリズム・フォーラム」は「Asian Pacific のツーリズム」をテーマに国内外の研究者や実務担当者に参加を呼びかけて2006年初頭に開催すべく準備を進めている。ここでは、政府の計画にも拘らずなかなか成果に結実しないインバウンドツーリズムについて議論していただくとともに、グローバルな視点の必要性やツーリズムの「光と影」の実情を認識し、それらを克服する方策を模索する予定である。

既に、諸外国ではツーリズムの経済的な影響力を見込んで、大学で独立した研究部門を設けている。国によって状況はさまざまであったが、当初は既存の研究部門の混成で展開していたものが次第に独自の研究部局として独立するようになり、卒業生も関連する分野に輩出して、影響力が顕在化してきた。わが国でも、近き将来には国立大学法人で関連する学部が創設される予定がある様な段階にまで来ている。神戸大学では、総合大学であるとの特性も活かして「社会・文化連携」部門で取り組みを進めることになっており、今後はそれに応じてこのような研究集会が続出するものと期待されている。

今回のフォーラムで明になったことの一つは国土交通省や兵庫県が「観光」から脱却して「ツーリズム」を標榜しても、その実態は未だに従来のものから大きく飛躍したものにはなっていないことである。つまり、その取り組みは緒についた段階であるといつてもよい。国のレベルでは、インバウンドに焦点を

おいて統計の整備をすることがスケジュールに上っているようであるが、WT
Oが提唱するTSA（Tourism Satellite Account）といったツーリズム関連統計全
般ということになると、まだ先の長い取り組みになりそうである。叢書No.65
でも指摘したように、TSAが整備されただけでは、それを活用することはでき
ない。各年次の地域連関表など連続した統計が同時に準備されねばならない。
望ましい状況がどのような姿になるのかを知るためにも、全国的には先例もあ
ることなので、兵庫県でも早急に取り組みを始めてはどうかと思う。

以前わが国では、観光開発あるいは観光振興というのは、それ以外に何ら産
業を呼び寄せる魅力に欠けている地域が対象と考えられていたくらいがある。
観光開発適地は産業振興に関する要素が不足していることの代名詞としても考
えられたのである。その後、アーバン・ツーリズムなどといった言葉もあるよ
うに、必ずしも僻地を対象したものではなくなってきているが、産業が発展し
ている地域では風光明媚を売り物にすることは希で、場合によつては「煙の都」
と後日には公害の象徴と考えられることを誇っていたような時期もあった。し
かし、環境への関心の高まりや平和への希求が強くなるに従つて、「観光」が
それらに即応した見込みのある産業として浮かび上がってきたのである。その
後、さまざまなツーリズムが展開してきたのは、先に挙げた叢書No.61に詳し
く述べられている通りである。

当研究所の「ツーリズム」研究部会に属するメンバーの関心は多彩である。
時には、メンバーの関心を一つに集中して、またある場合には、それぞれの関
心を活かした形での共同研究が推進されることになっている。今年度は、都市
部におけるツーリズムの要素を関係者を招いてお話を伺いながら研究すること
が始まっている。それと並行して、文献研究だけではなく、兵庫県内の特定地
域を対象にしたフィールド・スタディも検討されている。その候補地域として
は淡路あるいは但馬地域が研究会のメンバーの間では話題にのぼっている。

また、県下各地で「地域ガイド」などとして、訪問者や地域の年少者あるい

は新規参入者に対して行っている人たちにもフォーラムへの参加を呼びかけた。彼ら／彼女らが求めているのは、いわゆる地域資源をどのように評価して、訪問者たちに伝えていくかのノウ・ハウである。これらは社会人教育の範疇になるが、さまざまな形態で取り組みが進められている分野である。世界各国を見ると大学のスタッフも加わってさまざまな取り組みが行われてはいるが、わが国の大学がさほど重視してこなかったところである。高齢社会が進展するなどの状況下では大学の地域への貢献の一環として取り組まなければならない課題であろう。

メンバーの関心を一つずつ取り上げながら、多少息の長い研究を進めようとしている次第であるが、一方では叢書No.65で指摘したような研究の基礎になるデータの整備にも取りかかるべきであろうと考えている。世間から孤立したままでは地域連携は進まない。地域のニーズを正確に把握して、取り組みに当たることも重要である。そのためには、関心をお持ちの方々から自由にご意見を寄せていただきたいと思っている。条件があえば、共同研究も可能ではないかとも考えている。

研 究 叢 書 (既 刊)

-
- 第1号 生産と分配に対する貿易効果の分析 片野 彦二著 1961年
- 第2号 國際貿易と經濟發展 川田富久雄著 1961年
- 第3号 國際私法の法典化に関する史的研究 川上 太郎著 1961年
- 第4号 アメリカ經營史 井上 忠勝著 1961年
- 第5号 神戸港における港湾荷役經濟の研究 柴田銀次郎・佐々木誠治・秋山 一郎・山本 泰督共著 1962年
- 第6号 企業評価論の研究 小野 二郎著 1963年
- 第7号 経営費用理論研究 小林 哲夫著 1964年
- 第8号 船内労働の実態 佐々木誠治著 1964年
- 第9号 船員の雇用制度 山本 泰督著 1965年
- 第10号 國際私法條約集 川上 太郎著 1966年
- 第11号 地域經濟開発と交通に関する理論 野村寅三郎著 1966年
- 第12号 國際私法の国際的法典化 川上 太郎著 1966年
- 第13号 南北貿易と日本の政策 川田富久雄著 1966年
- 第14号 インド経済における所得分配構造 片野 彦二著 1968年
- 第15号 ラテンアメリカ經濟統合の理論と現実 西向 嘉昭著 1969年
- 第16号 会計情報とEDP監査 中野 熱・大矢知浩司共著 1972年
- 第17号 國際収支と資産選択 井川 一宏著 1974年
- 第18号 経営計測システムの研究 定道 宏著 1978年
- Business & Economic Information Control and Analysis System
- 第19号 日本・オセアニア間の海上輸送とオセアニア主要港の現況 佐々木誠治著 1978年
- 第20号 計量經濟情報システム STEPS-BEICA 定道 宏・布上 康夫共著 1979年
- 第21号 海上運賃の經濟分析 下條 哲司著 1979年
- 第22号 國際法上の船籍論 嘉納 孔著 1981年
- 第23号 ブラジル經濟の高度成長期の研究 西島 章次著 1981年
- 第24号 資本蓄積過程の分析 下村 和雄著 1983年
- 理論的枠組とオーストラリア經濟への適用—

研究叢書(既刊)

- 第25号 会計情報公開論 山地 秀俊著 1983年
- 第26号 企業の国際化をめぐる特殊研究 井上 忠勝・山本 泰督・
下條 哲司・井川 一宏・山地 秀俊共著 1983年
- 第27号 海運における国家政策と企業行動 海運経済専門委員会著 1984年
- 第28号 オーストラリアの金融システムと金融政策 石垣 健一著 1985年
- 節29号 会計情報公開制度の実証的研究 山地 秀俊著 1986年
—日米比較を目指して—
- 第30号 配船の理論的基礎 下條 哲司編著 1986年
- 第31号 仮想電子計算機と計算機言語システム 安田 聖著 1986年
—世界計量経済モデル分析システム—
- 第32号 期待効用理論 —批判的検討— 伊藤 駒之著 1986年
- 第33号 アメリカ企業経営史研究 井上 忠勝著 1987年
- 第34号 反トラスト政策 —経済的および法的分析—
カールケイゼン・ドナルド F. ターナー共著
根岸 哲・橋本 介三共訳 1988年
- 第35号 会計情報システムと人間行動 中野 黙編著 1989年
- 第36号 国際金融経済論の新展開 井澤 秀記著 1989年
—変動為替相場制度を中心として—
- 第37号 労働市場研究の現代的課題 小西 康生・三木 信一共著 1989年
- 第38号 香港企業会計制度の研究 中野 黙編著 1989年
- 第39号 国際比較統計研究モノグラフ1 能勢 信子編著 1990年
- 第40号 経済発展と還太平洋経済 西向 嘉昭・石垣 健一・西島 章次・片山 誠一共編著 1991年
- 第41号 労使問題と会計情報公開 山地 秀俊著 1991年
- 第42号 経営財務と会計の諸問題 森 昭夫編著 1992年
- 第43号 国際比較統計研究モノグラフ2 小西 康生編著 1993年
- 第44号 アメリカ現代会計成立史論 中野 常男・高須 教夫・山地 秀俊共著 1993年
- 第45号 ネットワーク環境における情報システムの研究 宮崎 耕著 1994年
- 第46号 財務情報分析と新情報システム環境 民野 庄造著 1995年
- 第47号 税効果会計 梶原 晃著 1995年

研究叢書(既刊)————

- 第48号 アジア経済研究 阿部 茂行著 1997年
- 第49号 会計とイメージ 山地 秀俊・中野 常男・高須 教夫著 1997年
- 第50号 地域保健医療情報システム 小西 康生・中村 利男著 1997年
—加古川地域における地域情報化戦略—
- 第51号 原価主義と時価主義 山地 秀俊編著 1998年
- 第52号 RIEB データベースの研究 安田 豊・阿部 茂行著 1998年
- 第53号 地方公共分野の情報化 小西 康生編著 1998年
- 特 別 日本の金融システムの再構築とグローバル経済 石垣 健一・日野 博之編著 1998年
- 第54号 日本国銀行システムの変貌と企業会計 山地 秀俊編著 2000年
- 第55号 日・韓自動車産業の国際競争力と下請分業生産システム 金 奉吉著 2000年
- 第56号 地方自治体のIT革命 小西 康生・中村 利男著 2000年
—21世紀型自治体の情報化戦略—
- 第57号 90年代ブラジルのマクロ経済の研究 西島 章次・Eduardo K. Tonooka 著 2001年
- 第58号 マクロ会計政策の評価 山地 秀俊編著 2001年
- 第59号 米州におけるリジョナリズムとFTA 細野 昭雄著 2001年
- 第60号 韓国の構造改革と日韓・東アジアの経済協力 金 奉吉・井川 一宏共編著 2002年
- 第61号 現代ツーリズム研究の諸相 小西 康生・貴多野乃武次編著 2002年
- 第62号 ラテンアメリカにおける政策改革の研究 西島 章次・細野 昭雄編著 2002年
- 第63号 アメリカ不正会計とその分析 山地 秀俊編著 2003年
- 第64号 Local Currencies —その現状と課題— 小西 康生編著 2003年
- 第65号 「ツーリズム」関連統計 小西 康生・貴多野乃武次編著 2004年
—その現状と課題—
- 第66号 韓・日FTAと韓国IT産業 趙 炳澤・井川 一宏編著 2005年
—グローバル化と東アジア経済統合の進展の中で—

“観光”から“ツーリズム”へ
—多様なツーリズムの可能性を探る—

研究叢書 67

(非売品)

平成18年3月20日 印刷

平成18年3月27日 発行

編
神戸大学経済経営研究所教授
小 西 康 生

発行所
神戸市灘区六甲台町2-1
神戸大学経済経営研究所

印 刷
神戸市中央区港島南町5-4-5
交友印刷株式会社

